

# 寺尾中城遺跡

群馬ファミリーパーク建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



寺尾中城遺跡正誤表

位置	誤	正
5頁左11行	第5図☆印	第5図中央
// 左17行	近年団丘陵を	近年、段丘を
// 右 2行	解析	開析
11頁右 9行	更により	更に
15頁左15行	見られ	見られた
// 右27行	(破線)	(実線白抜き)



# 寺尾中城遺跡

群馬ファミリーパーク建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





寺尾中城遺跡全景



堀切内部の状況（南東より）





# 序

高崎市南部の丘陵地帯に群馬県が建設を進めている「群馬ファミリーパーク」の一部に南北朝時代の14世紀頃築城された「寺尾中城跡」があることは、関係者の間では夙に知られておりました。ファミリーパークの建設工事に際しては、城の大部分が保存、整備され、活用されることになりましたが、平成9年度になって城西端の一部が工事の都合により削り取られることとなりました。そして急遽、記録保存の為の緊急発掘調査が行われることになり、発掘調査が当事業団に委託されました。

当事業団では、全体事業のやりくりの中で平成9年の12月より翌年の3月まで4カ月の月日をかけて発掘調査を行いました。寺尾中城は、丘陵地帯にあるといっても城の両側は急斜面であり、しかも尾根筋にあたるため発掘調査は困難を究めました。しかし関係機関、地元の方々の協力を得て、事故もなく予定の期間内で調査を終了することが出来ました。

本年になって、発掘調査の成果を報告する作業を進めていましたが、ようやくそれが纏まり、ここに「寺尾中城遺跡」の発掘報告書を刊行することになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまで群馬県土木部都市施設課、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元関係者等には大変お世話になりました。特に発掘作業に従事した発掘補助員の皆様には、不便な調査の中、発掘調査遂行に担当職員共々努力して下さいましたことに対し、深く感謝申し上げます。

本報告書が、本県の城郭研究、特に中世の城郭、とりわけ南北朝時代の城郭を明らかにするための資料として、大いに活用されますことを願い、序とします。

平成12年2月15日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野 宇三郎



## 例 言

- 1 本書は群馬ファミリーパーク建設に伴う「寺尾中城遺跡（てらおちゅうじょういせき）」の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 寺尾中城遺跡は高崎市寺尾町字長坂に所在する、「寺尾中城」の一部を調査対象とするためこの城の名を以て遺跡名としている。
- 3 本遺跡の概要は巻末の抄録の通りである。
- 4 発掘調査
  - (1) 本遺跡の発掘調査は群馬県（土木部都市施設課）の委託により、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）が実施したものである。
  - (2) 発掘調査は平成9（1997）年12月15日より平成11（1998）年3月31日の間に実施した。
  - (3) 発掘調査組織は以下の通りである。
    - ① 事務 常務理事 菅野 清、事務局長 原田恒弘、副事務局長兼調査研究第1部長 赤山容造、管理部長 渡辺 建、調査研究第3課長 真下高幸、総務課長 小淵 淳、係長 笠原秀樹・井上 剛、主任 須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司、嘱託 大澤友治（事務補助）吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、安藤由美、（運転手）松下次男、浅見宣記、吉田 茂
    - ② 調査担当 主幹兼専門員 石守 晃、調査研究員 長岡将之（主幹兼専門員 井川達夫）
    - ③ 発掘補助 曾我 功、曾我みつ子、悴田忠男、大前希世子、近藤 上、須藤利夫、須藤はるの、山口雅子、松田日登美、河野みどり
- 5 整理事業
  - (1) 本遺跡の整理事業は群馬県（都市施設課）の委託により事業団が事務局本部（勢多郡北橋村下箱田所在の群馬県埋蔵文化財調査センター内）に於いて実施した。
  - (2) 整理事業は、平成9（1997）年12月15日より平成11（1998）年3月31日の間に実施した。
  - (3) 整理事業に拘わった組織は以下の通りである。
    - ① 事務 常務理事 小野宇三郎、常務理事兼事務局長 赤山容造、調査研究第1部長 神保侑史、管理部長 住谷 進、調査研究第2課長 真下高幸、総務課長 坂本敏夫、係長 笠原秀樹・小山建夫、係長代理 須田朋子・吉田有光、主任 柳岡良宏・岡嶋伸昌、主事 片岡篤夫、嘱託 大澤友治、（事務補助）吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子
    - ② 整理担当 主幹兼専門員 石守 晃
    - ③ 整理補助 長沼久美子、佐子昭子、阿部幸恵、市田武子、大塚とし子、渡辺フサ枝、萩原鈴代
    - ④ 写真室 係長代理 佐藤元彦
- 7 発掘調査・整理事業に於いては、下記のように測量・自然科学分析等の業務を委託した。
  - ① 航空測量業務及び航空写真撮影業務……株式会社測研
  - ② 機械掘削・人力掘削を含む土木作業……井上工業株式会社
  - ③ 樹種同定・カーボンデイトーピング……株式会社パレオ・ラボ

- 8 本書の執筆は以下の通り
- ① 第2章第2節（自然を取り巻く環境—自然的環境）は矢口裕之が執筆した。
  - ② 第4章（自然科学分析）では、委託した自然科学分析の鑑定報告書を転載した。
  - ③ 第5章第1節（「寺尾城と寺尾中城」）は茂木渉先生に玉稿を賜った。
  - ④ 上記①・②・③以外は石守晃が行った。
- 9 本遺跡からの遺物の出土は見られなかったが、炭化物、土壌サンプル等の自然遺物、及び遺構図面、遺構写真は群馬県埋蔵文化財調査センター内に保管され、事業団普及資料課が当該資料の管理を行う。
- 10 発掘調査及び整理事業の実施に当たっては下記の機関・個人の協力を賜った。記して謝意を表します。群馬県公園事務所高崎市教育委員会、高崎市史編纂室、井上工業株式会社群馬ファミリーパーク建設現場事務所、井川達夫、柴田龍司、関晴彦、原眞、藤巻幸夫、茂木渉、山崎諷

## 凡 例

- 1 遺構実測図は下記を基準とした。  
調査区全体図は1/120または1/100・1/80、部分図は1/60。
- 2 遺構図の断面図は海拔標高を示し、方位記号は座標軸（国家座標Ⅳ系）を示す。
- 3 土層の色調等については「農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』」を使用した。
- 4 本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り。
  - ① As-A：浅間山天明3年（1783）噴出テフラ。所謂「A軽石」。
  - ② As-B：浅間山天仁元年（1108）噴出テフラ。所謂「B軽石」。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
写真図版目次	

## 報告書抄録

第1章 調査経過	1
第1節 発掘調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 調査方法	3
第2章 遺跡を取り巻く環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 寺尾中城遺跡およびその周辺の地質	5
第3節 歴史的環境	7
第3章 発見された遺構	9
第1節 遺跡の概要（寺尾中城と調査区）	9
第2節 一つ尾根調査区	10
第3節 二つ尾根調査区	11
第4節 三つ尾根調査区	15
第5節 四つ尾根調査区	15
第6節 五つ尾根調査区	18
第7節 堀 切	19
第4章 自然科学分析	24
第1節 放射性炭素年代測定	24
第2節 寺尾中城の堀切から出土した炭化材樹種	25
第5章 まとめ	26
第1節 寺尾城と寺尾中城	26
第2節 調査された遺構に関する小考	30
第3節 おわりに	33

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図・群馬ファミリーパーク全体図	1	第13図	四つ尾根調査区	16
第2図	群馬ファミリーパーク地内の文化財位置図	2	第14図	四つ尾根調査区頂部	17
第3図	表土除去作業の実施経過	3	第15図	五つ尾根調査区	18
第4図	調査区の区分と基本土層	4	第16図	堀切全体図	20
第5図	遺跡周辺鳥瞰図	5	第17図	堀切南部	21
第6図	寺尾中城周辺の地質概要図	6	第18図	堀切頂部	22
第7図	遺跡分布図	8	第19図	堀切北部	23
第8図	山崎一先生作図寺尾中城縄張り図	9	第20図	根小屋城縄張り図	28
第9図	一つ尾根調査区	10	第21図	寺尾中城縄張り図	28
第10図	二つ尾根調査区	12	第22図	寺尾中城の尾根筋	31
第11図	二つ尾根調査区頂部	13	第23図	四つ尾根頂部ピット群 (CG)	31
第12図	三つ尾根調査区	14	第24図	堀切付近鳥瞰図 (CG)	32

## 写真図版目次

口 絵	遺跡全景航空写真	P L 5	堀切(1)
	堀切	P L 6	堀切(2)
P L 1	航空写真	P L 7	堀切(3)
	調査前の状況	P L 8	堀切(4)
P L 2	調査風景	P L 9	自然科学分析
P L 3	一つ尾根調査区	P L 10	寺尾中城址及び周辺の城館址
	二つ尾根調査区		
	三つ尾根調査区		
P L 4	四つ尾根調査区		
	五つ尾根調査区		

# 寺尾中城遺跡

〔本文〕





# 第1章 調査経過

## 第1節 発掘調査に至る経過

(仮称)「群馬ファミリーパーク」(以下「仮称」を略す)は高崎市寺尾町に群馬県が建設中の「多様化するレクリエーション需要に対応した広域の利用を目的とした」総面積60.3haの大規模公園である。<sup>(1)</sup>

群馬ファミリーパークは時々の群馬県の施策計画に基づき、<sup>(2)</sup>「大幅な地形の変更は控え」ながら寺尾

中城を連想させる「砦(尾根上の施設群)」と“濠(沢)”からなる“城郭の森づくり”を整備テーマとして設計がなされ、工事が進められてきている。

ところで建設予定地内の埋蔵文化財等の取り扱いについては、平成4年の2月及び10月、群馬県土木部都市施設課(以下「施設課」とする)及び群馬県都

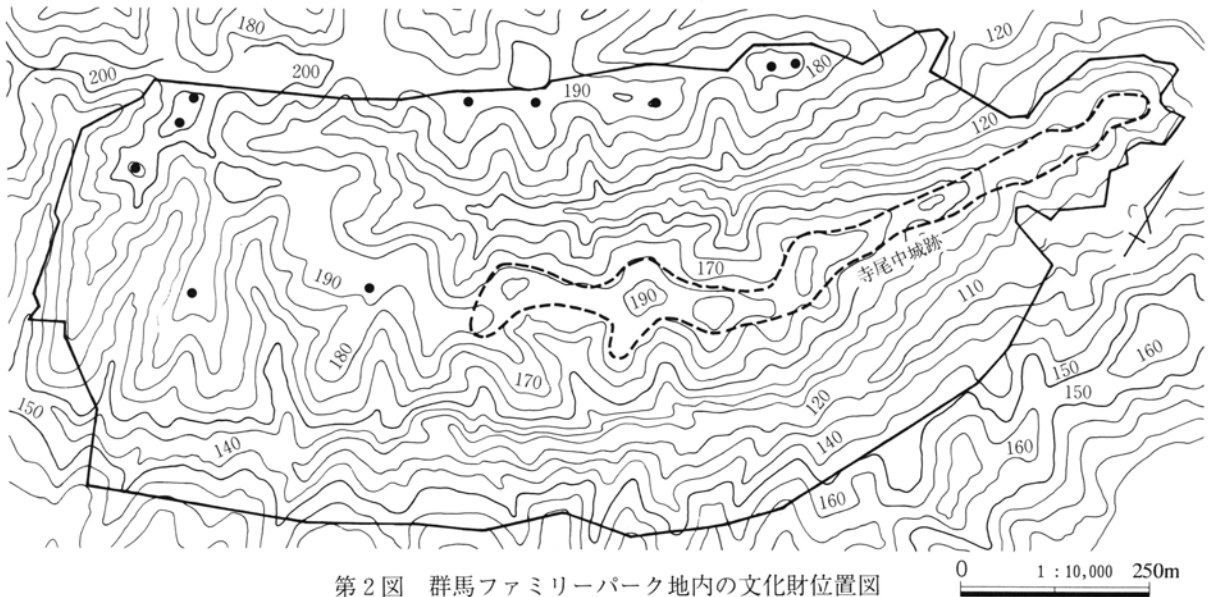


国土地理院「長野」「宇都宮」S=1/200,000



第1図 遺跡位置図・群馬ファミリーパーク全体図(☆印が調査区)

## 第1章 調査経過



第2図 群馬ファミリーパーク地内の文化財位置図

市公園事務所（以下「公園事務所」とする）と、群馬県教育委員会文化財保護課（以下「保護課」とする）が協議を行い、用地内に見られる“墳丘”は記録保存を行うこととし、寺尾中城については保存し活用することが確認された。

これに基づいて公園事務所と保護課は平成4年4・5月、平成6年4・5・7～9月、平成7年2月、平成9年1月に“墳丘”10ヶ所についての工事立ち会いを行い、「古墳」が自然丘であって遺構ではないことを確認している。（第2図、●印）

さて平成8年12月、工事立ち会いに伴って公園事務所と打ち合わせを行った保護課は保存される筈の寺尾中城の西端部が工事範囲に入ることを知り、年明けの平成9年1月、高崎市教育委員会（以下「市教委」とする）を交えた協議を提案。調整を図ることとなる。これは建設側が山崎一先生の縄張り図（山崎、1976）等で周知されていた城域を念頭に設計を進めていたのに対し、文化財側が城域が西に広がると認識（第2図）していた<sup>(3)</sup>ため行き違いが生じた

ためである。同年2・3月に公園事務所・保護課・市教委は全面保存も視野に入れて協議を行ったが、結局同年4月に施設課との調整によって、該当部分の保存は記録保存に留めることで決したのである。

これにより、平成9年10月28日、公園事務所より保護課に対し対象面積7,000㎡とする埋蔵文化財調査の依頼があり、同年12月1日付で保護課は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に調査の実施を依頼。同15日に事業団への委託が決して、事業実施の運びとなったのである。

註 (1) 昭和59年度の適地調査で8カ所の候補地から選定され、昭和60・61年度に調査、昭和62・63年度に基本設計、平成元・2年に環境影響調査を行い、平成3年度には設計開始。平成4・5年度には地質調査も行い、これ以降用地買収や建設に着手している。昭和60年度～平成9年度の「群馬県土木概要」「群馬県土木事業概要」（群馬県土木部）参照。  
(2) 「新群馬計画」（1986.3）、「躍進ぐんま計画」（1991.3）、「新ぐんま2010計画」（1992.3）に大規模公園として、群馬新社会計画「グリーンプラン」（1996）では整備対象として取り上げられている。  
(3) このことはあまり周知されず、「群馬の中世城館」（群馬県教育委員会（1990））では山崎図が基本であり、平成8年3月刊行の「高崎市史資料編3中世I」（高崎市史編さん委員会）でもその範囲は山崎図に限られている。

## 第2節 発掘調査の経過

平成9（1997）年

12月15日 発掘準備開始。

12月26日 旧地形に対する航空写真測量実施。

平成10（1998）年

1月7日 本格的発掘調査開始。

1月8日 午後からの降雪で13日まで作業中断。

- 1月14日 試掘トレンチ掘削。表土剥ぎを開始。
- 1月21日 尾根周辺部のAs-Aの除去及び確認面の精査開始。(第3図-①~⑤)
- 1月28日 断面図作図及び写真撮影開始。
- 2月3日 堀切南半部掘削開始。
- 2月28日 北側斜面表土剥ぎと精査開始。(第3図-⑥~⑦)
- 3月2日 尾根周辺部の遺構確認面の精査完了。
- 3月3日 堀切の掘削北半部に移る。
- 3月4日 井川主幹応援に入る。(3月6日まで)
- 3月10日 北側斜面東半部遺構確認面精査完了。
- 3月11日 調査区中部のピーク部分の精査と、西端頂部のピット処理開始。
- 3月20日 調査区西端頂部のピット処理、及び中部のピーク部分の精査終了。
- 3月23日 堀切の掘削終了。
- 3月24日 全ての掘削及び地上測量完了。
- 3月25日 航空測量、遺構写真撮影実施。
- 3月26日 現場事務所撤収開始。
- 3月30日 地上での遺構写真撮影実施。
- 3月31日 撤収完了。全調査を終了。

### 第3節 調査方法

#### (1) 発掘調査の方法

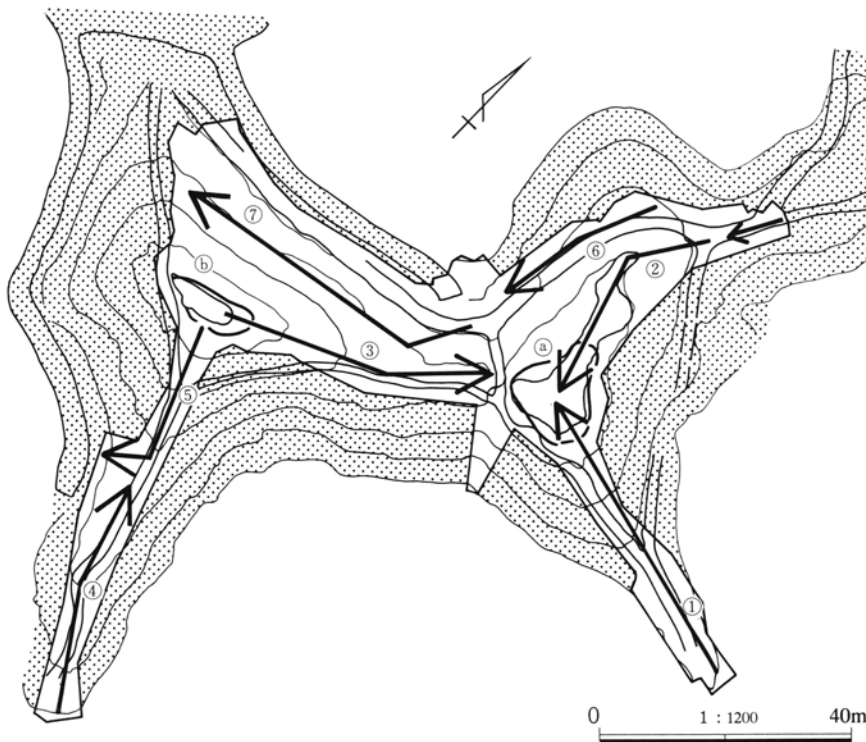
- ① 調査対象区域はやせた尾根とその両側の急峻な斜面部からなるため、安全管理の面から掘削は主に尾根筋及び安全の確保され得る両側斜面、及び北側斜面部を主たる対象として実施した。
- ② 表土及びAs-A軽石面の表出までは土木機械を用い、As-Aの除去及び下位層に対する精査、遺構確認、遺構等の掘削は人力で行った。
- ③ 堀切内の掘削は人力で行い、北側斜面部の表層の除去を除いて土木機械は用いなかった。
- ④ 平面図として原則航空測量で、断面図は地上測量で作図した。尚、縮尺は平面図では1/200、1/100、1/20、断面図では1/20で作図した。
- ⑤ 写真記録の撮影は、35mm及びブローニ版によるモノクロ写真とカラー写真で適宜行った。航空写真撮影はブローニ版を使用した。

#### (2) 調査区の設定

調査区の設定に当たっては、グリッドによるより

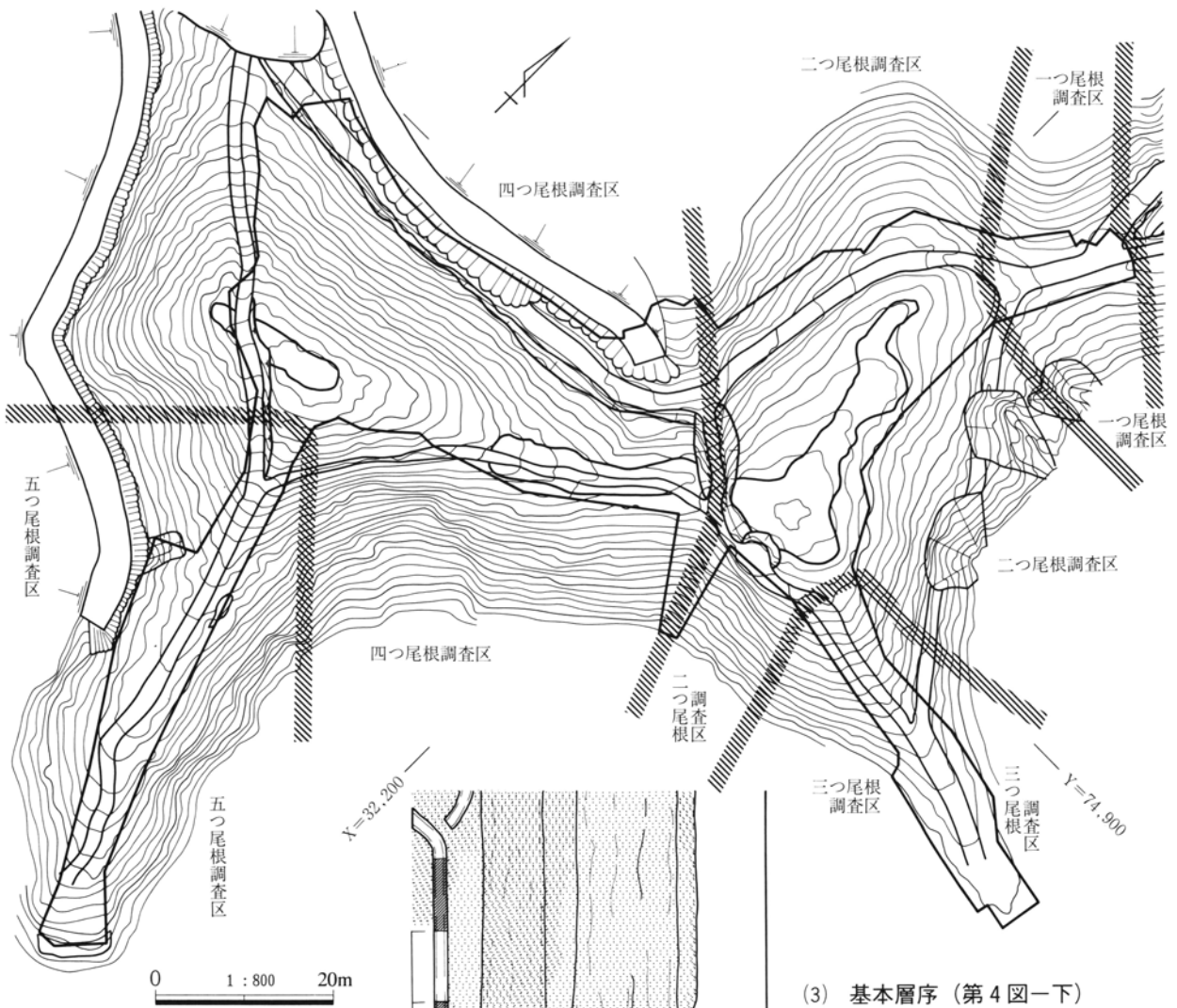
地形に即した方が適当と判断したため、尾根筋によって五つの調査区に区分した。調査区の名前は現場で尾根の数を数えていったものに由来する。

尾根筋には東西連なるものと、中位及び西端で分岐するものがある。前者のうち調査区最東端にあって東西の尾根筋を鞍状につなぐものを「一つ尾根調査区」、その西側から中位のピークまでを「二つ尾根調査区」、二つ尾根調査区西端部から南に延びる尾根筋を「三



第3図 表土除去作業の実施経過

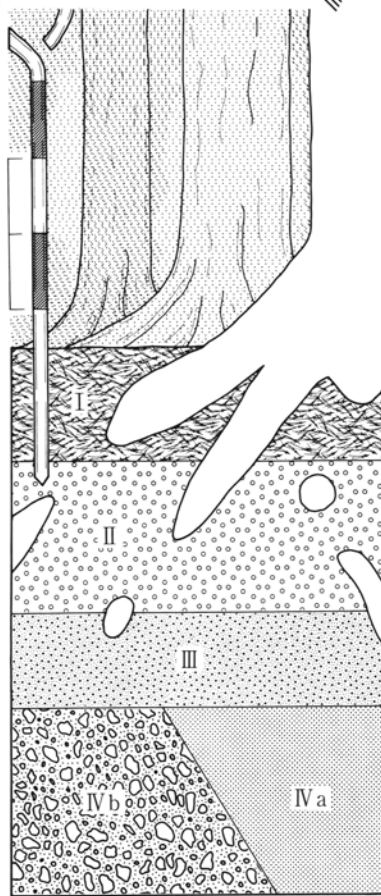
第1章 調査経過



つ尾根調査区」、二つ尾根調査区の堀切を挟んで西側から東西走向の尾根筋西端のピークまでを「四つ尾根調査区」、このピークから南に分岐する尾根筋を「五つ尾根調査区」とした。

尚、二つ尾根調査区と四つ尾根調査区の境の「堀切（部分）」は、調査区に準拠して扱っている。

また、調査時点に於いては二つ尾根調査区西端の頂部を「郭」、四つ尾根調査区の西端部の頂部を「高見」と通称し、一部記録類の中にこの名称が残されている。



第4図 調査区の区分と基本土層

(3) 基本層序 (第4図一下)

本遺跡の基盤層は第3章第2節に後述する新生代第三紀中新世後期の地層であり、ローム質のシルト層 (第IV a層)、砂礫層 (第IV b層)、砂岩層 (第IV a層) 等が斜め方向に互層を成し、場所場所で異なる性質を示している。この基盤層の上にAs-B軽石 (浅間山、1108年噴出) を含む、厚さ15cm程度以下のローム質のシルト層 (第III層) が堆積する。第III層の上にAs-A軽石 (第II層、浅間山、1783年噴出) が堆積し、海面質の腐葉土の黒ぼく土 (第I層) が乗っている。

## 第2章 遺跡を取り巻く環境

### 第1節 地理的環境

本遺跡の所在する高崎市は西毛と呼ばれる群馬県西部の中心都市で、商業地を中心にその周囲に大小の団地や宅地が点在する農地が広がっている。市役所は碓氷川合流地点の烏川左(東)岸に遺る高崎城址に偉容を誇り、その東の中心市街地は高崎城の城下町を基としている。また交通の十字路を自認する高崎は、古くから関東から上信・上越国境へ通ずる交通の要衝でもある。

高崎市のうち烏川右岸の地域は旧群馬郡域が多くを占める高崎市の中にあつて旧片岡郡・旧緑埜郡に含まれる地域である。ここは東を烏川、北を碓氷川、南を鑄川に画され、西には安中市大谷や吉井町奥平などに続く所謂観音山丘陵が広がっている。丘陵地と烏川の間には平坦部があつて帯状に南北に延びているが、現在では北部を中心に広い範囲で市街化が進む一方、南部を中心に水田が広がる農村地帯も残されている。また丘陵部では近年団丘陵を広く削つ

て住宅団地やゴルフ場、福祉施設などが造られるようになってきてはいるが、脆弱な地盤と解析の進む険しい地形、そして国有林が広がるためか、高崎駅に至近な位置にあり乍あまり開発も行われないうちに旧来からの景観が残されてきた。こうした烏川右岸の地域は元々高崎の旧市街地から南の藤岡市や南西の吉井町方面に抜ける交通路でもあったが、今日では烏川に3本の橋が架かり、道路も整備されて、特に吉井方面へ抜ける道路として交通量も多くなつてきている。

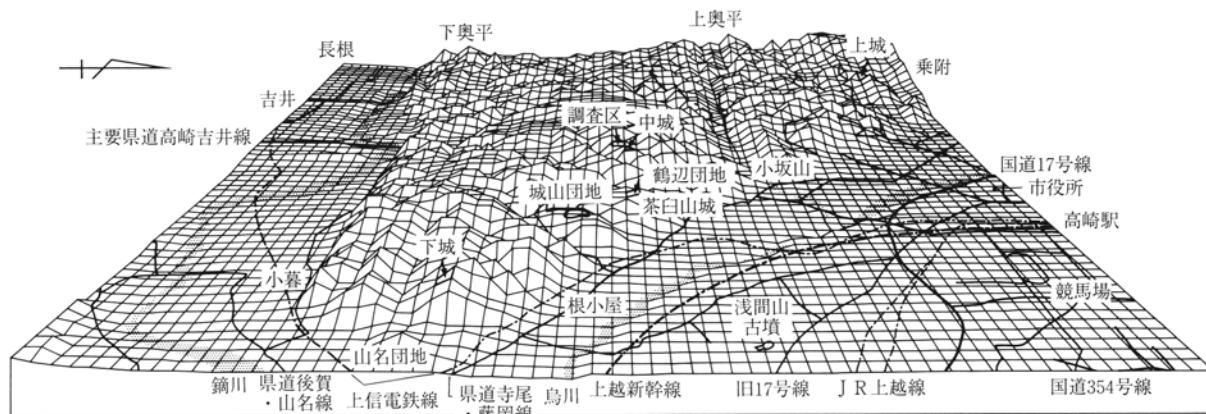
寺尾中城(第5図☆印)はこの地域の中程、丘陵部の東寄りに位置し、南を衣沢川、北をその支流の北沢川に深く削られて急峻な斜面を伴う東西走向の「中城」と呼ばれる尾根上に造られている。東側からの入路は険しいが、観音山丘陵中からの進入は比較的概容易である。また、この尾根筋の南斜面には炭化程度の低い亜炭の炭坑の一つがあつた。

### 第2節 寺尾中城遺跡およびその周辺の地質

群馬県南西部の高崎から富岡にかけての地域には、新第三系が分布し丘陵地を呈しており、岩野谷丘陵と呼ばれている。この地域は、関東盆地の北西縁、関東山地の北縁部にあたり、烏弧会合部といつ、

た位置からみても複雑な構造発達史を呈する地域である。

岩野谷丘陵の地質調査・研究は、藤本・小林(1938)の概括的な研究にはじまり、千地・紺田(1978)



第5図 遺跡周辺鳥瞰図

第2章 遺跡を取り巻く環境

野村・秋間団研グループ(1981)、大石・高橋(1990)などの層序に関する研究があり、生層序や古生物、堆積など調査研究が多岐にわたっている。岩野谷丘陵に分布する新第三紀層は、下位より牛伏層～板鼻層からなり(大石・高橋,1990)、およそ16～8Ma(Maは百万年前)前後の海成～陸成層と考えられている。

寺尾中城遺跡が立地している岩野谷丘陵北東縁部の地域には、中新統の板鼻層が分布し、丘陵縁辺部には第四系の野殿層(中村・高崎地学愛好会,1989;矢口ほか,1992)が分布し、板鼻層を不整合で覆っている。また丘陵と高崎台地縁では、烏川構造線(野村,1977)を境界にして台地側には第四系が分布し、表層部では高崎台地を構成している前橋岩なだれ堆積物や高崎泥流堆積物(新井ほか,1993)が分布し新第三系を覆っていると考えられる(図1)。

寺尾中城遺跡発掘調査地の基盤を構成する板鼻層は、藤本・小林(1938)により、安中市板鼻付近に分布する礫岩を主とする地層から命名された。

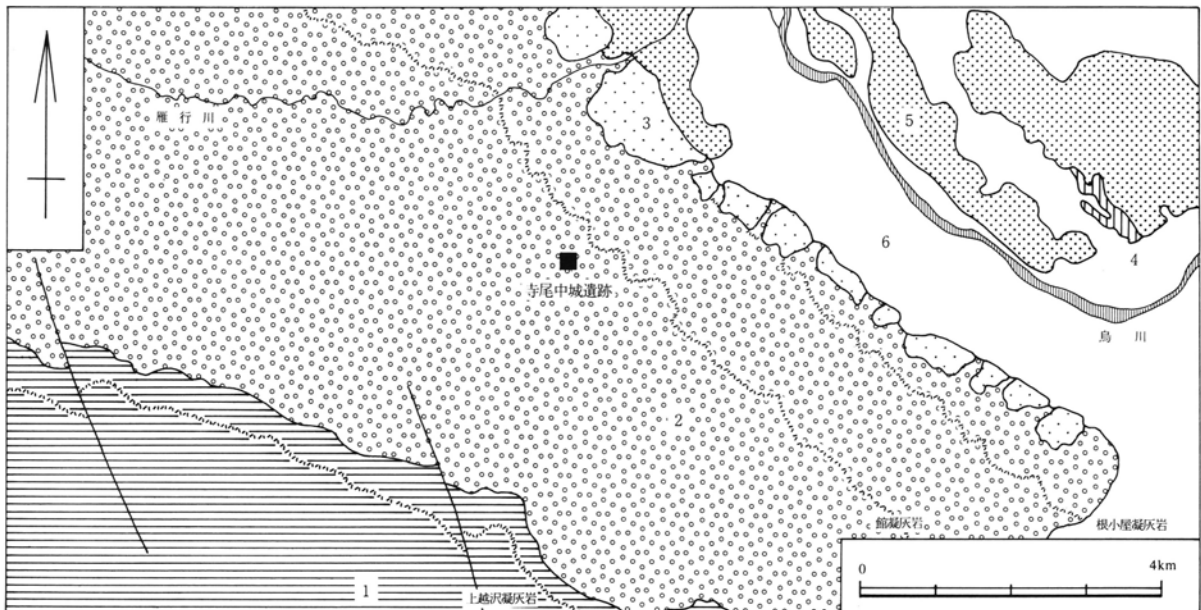
板鼻層は礫岩、砂岩、シルト岩、凝灰岩などから構成され、上位層ほど礫岩が卓越している。本層の層厚は約1200mで、分布は藤岡市庚申山付近から岩野谷丘陵、秋間丘陵をへて烏川上流の相間川流域や碓氷川上流部に断片的に分布している。

寺尾中城遺跡発掘調査地に分布する板鼻層は、下位より礫岩、砂岩、シルト岩の互層からなり、砂岩層中には人頭大のノジュールが見られ、貝化石が産出する。これらの地層群の上位には館凝灰岩と呼ばれる複輝石安山岩質凝灰岩層が見られることから、遺跡周辺の地層群は板鼻層中部に相当すると思われる。

板鼻層下部～中部は上方粗粒化非対称サイクルを呈す堆積サイクルが認められ、三角州の堆積物であると考えられている(久保・角田,1973)。

文献

- 新井雅之・矢口裕之・中村正芳・早川由起夫・高崎地学愛好会(1993) およそ1万年前に発生した高崎泥流の分布と起源. 日本地質学会第100年学術大会, 講演要旨, pp296.
- 千地万造・紺田功(1978) 富岡層群および西八代層群・静川層群の浮遊性有孔虫による生層序-カプラン階についての考察-。「日本の新生代地質」池辺展生教授記念論文集, pp73-92.
- 藤本治義・小林学(1938) 群馬県碓氷川及び鏡川流域の第三紀層に就いて. 地質学雑誌, 45, 533, pp205-226.
- 久保誠二・角田寛子(1973) 群馬県高崎市西方に分布する板鼻層の堆積サイクル. 地質学雑誌, 79, 10, pp687-697.
- 中村正芳・高崎地学愛好会(1989) 群馬県高崎市西部碓氷川下流域の第四系. 日本地質学会第96年学術大会講演要旨, pp276.
- 野村哲・秋間団体研究グループ(1981) 関東平野北西縁の地質. 地質学論集, 20, pp161-167.
- 野村哲(1977) 関東平野北西部の地質構造について. 地質学論集, 14, pp127-131.
- 大石雅之・高橋雅紀(1990) 群馬県高崎地域に分布する中新統. 東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告, 92, pp1-17.
- 矢口裕之・榛名団体研究グループ・高崎地学愛好会(1992) 群馬県榛名火山周辺の中更新統. 第四紀, 25, pp57-62.



第6図 寺尾中城周辺の地質概要図(凡例: 1 原市層 2 板鼻層 3 野殿層 4 前橋泥流 5 高崎泥流 6 沖積層)

### 第3節 歴史的環境

遺跡周辺の歴史環境は城館址を中心に記述したいと思う。尚、第7図で集落遺跡を含む遺物包蔵地は実線(—)、古墳群は破線(---)、発掘調査された集落遺跡で縄文時代のもは「○」、弥生時代は「△」、古墳時代は「▲」、律令期は「□」、中世は「■」、近世は「◆」で、水田遺跡は「ㄥ」で示した。また、城館址の範囲はスクリーントーン「■」、堀は太線「—」で示した他、鎌倉街道も太線「—」で示した。

本遺跡周辺の遺跡の分布は、平坦部に集まる傾向にあり、西の丘陵部のそれは薄いものであった。

平坦部に於ける集落遺跡(実線範囲)のうち縄文時代と弥生時代のもは僅かであったが、弥生時代中期の標識遺跡である竜見町遺跡(b)が烏川左岸部に在る。古墳時代のもは微高地上に広く分布し、重なるように古墳群も散見され、烏川左岸には大鶴巻古墳(g)等の大型の前期の古墳も在る。また水田址(u)も見られた。律令期の遺跡は広く分布し、微高地上に集落、低地部に水田址が発掘されている。

一方、丘陵地帯の分布は森林が広がることもあろうが、東部の平坦部に面した辺りや山中の平坦面に偏って見られる。時代的な偏りは見られなかったが、縄文時代前・中期の乗附中原遺跡(a)、古墳時代の寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡(n)などを調査している。

さて第7図の範囲で、城館址は50ヶ所ある。このうち屋敷等の比較的規模の小さいものは、怪しいもの(6)を含めて33ヶ所で、このうち屋敷或いは館とされるものは30ヶ所、砦が2ヶ所(20,40)、陣屋(2)1ヶ所であった。屋敷・館と認識されるものうち22ヶ所には城主等が想定された。また室町期とされるものが多いが、築城或いは使用年代が分かるものは16ヶ所で、14世紀に拘わるもの2ヶ所(8,26)、15世紀に拘わるものは在地領主大類氏の館である大類館(50)他2ヶ所(25,26)、16世紀以降のもは13ヶ所であった。16世紀以降のもは、例えば福田屋敷(1)が福田加賀守、高尾屋敷(42)が高尾佐渡守の居宅であるように豪族の居館であったものもあるが、これ

らを含め多くの屋敷、特に東部のもは同時期の環濠遺構(34,39)との立地上或いは形態的な類似から、近世集落の成立に寄与していたと想定される。

一方、15ヶ所を数える城郭遺構のうち、南北朝に拘わると言われるものは5ヶ所であり、15・16世紀に拘わるものが14ヶ所である。

南北朝時代、寺尾城に後醍醐天皇の孫尹良親王が居たと伝承があるように、新田氏の旧領であったこの辺りは南朝方に属したと言われている。この時造られたのが丘陵上の防衛ラインを構成する寺尾三城、即ち上城(乗附城、4)、中城(10)、下城(山名城、13)と、寺尾茶臼山城(11)である。この防衛ラインに囲まれた処が地域城としての寺尾城であり、鎌倉街道の渡河点もある要地である。また、尹良親王の在所としては山を背にした寺尾館(8)が適している。寺尾左近屋敷(9)も当時の館とされ、吉井町奥平にも小規模な地域城(18)が見られる。

15・16世紀の城郭は古くからあった城館を改修して使用しており、烏川以東の倉賀野氏(30,31)、和田氏(41,45)と和田氏配下の反町氏(37)、烏川以西の奥平氏(16,17)、岩崎氏(19)、乗附氏(4)、寺尾氏(10)、木部氏(13)ら在地領主に属するものが多かった。戦国期には上杉・武田・北条の進攻があり、根小屋城(12)を武田氏が築城している。尚、武田の改修を受けたとされる木部の要害は木部城ではなく近接する山名城(13)に比定する見解がある。

近世に入ると殆どの城郭は破棄されたが、和田城を取り込んだ近世城郭高崎城(21)が造られ、禰津の陣屋には禰津信直が入っている。

尚、治承4年(1180)に新田義重が引き籠もった寺尾城は寺尾周辺地域と考えられている。

#### [参考文献]

- 群馬県教育委員会 『群馬県の中世城館跡』 1988
- 吉井町教育委員会 『吉井町遺跡地図』 1995
- 高崎市史編さん委員会 『新編高崎市史資料編3 中世Ⅰ』 1996
- 高崎市教育委員会 『高崎市遺跡分布地図』 1998



〔城館址〕 1 福田屋敷 (16c.: 福田氏) 2 根津陣屋 (16c.: 根津信直) 3 峰岸屋敷 (峰岸氏) 4 乗附城 (寺尾上城、14c.: 南朝方、16c.: 乗附氏) 5 乗附屋敷 (乗附氏) 6 前田屋敷 7 石原屋敷 (16c.: 石原氏) 8 寺尾館 (14c.: 南朝方、16c.: 佐藤氏) 9 寺尾左近屋敷 (14c. か: 藤巻氏か) 10 寺尾中城 (14c.・16c.: 南朝方・寺尾氏) 11 寺尾茶臼山城 (14c.: 南朝方、16c.) 12 根小屋城 (16c.: 武田氏) 13 山名城 (寺尾下城、寺尾前城、14c.: 南朝方、16c.: 木部氏) 14 山名館 (山名氏か) 15 入道谷屋敷 (16c.: 樋口氏) 16 馬場城 (奥平氏) 17 奥平城 (奥平氏) 18 奥平地域城 (14c.: 奥平氏) 19 岩崎城 (15~16c.: 岩崎氏) 20 下並榎の砦 (16c.: 飯塚氏) 21 和田城 (15~16c.: 和田氏) 22 新後閑屋敷 (16c.: 新後閑氏) 23 佐野屋敷 (佐野氏) 24 堀口屋敷 (堀口氏) 25 清水屋敷 (15・16c.) 26 夕日長者屋敷 (14~16c.: 夕日長者) 27 和田下之城 (16c.: 和田氏) 28 倉賀野新堀屋敷 (15~16c.: 倉賀野十六騎か) 29 上稲荷前屋敷 (15~16c.: 倉賀野十六騎か) 30 倉賀野西城 (倉賀野氏) 31 倉賀野城 (雁城、12~16c.: 倉賀野氏、16c.: 金井淡路守) 32 万福寺屋敷 33 宮之前屋敷 34 江木環濠遺構 (16c.) 35 岡田屋敷 (岡田氏) 36 高閑屋敷 (16c.: 角田氏) 37 反町城 (16c.: 反町氏) 38 丸茂屋敷 (丸茂氏) 39 宇字名室環濠遺構 (16c.: 提氏ほか) 40 新堀の砦 41 下中居新井屋敷 (16c.: 新井大学) 42 高尾屋敷 (くぐり窓、16c.: 高尾氏) 43 下中居佐藤屋敷 (16c.: 佐藤氏) 44 下中居福田屋敷 (16c.: 福田氏) 45 道場屋敷 46 上大類新井屋敷 (16c.: 新井氏) 47 長井屋敷 (16c.: 長井氏) 48 天田館 49 大類城 (16c.: 和田氏) 50 大類館 (15c.: 大類氏) 51 村北屋敷 52 中林城 (16c.: 馬庭氏)

〔遺跡及び史跡 (一部)〕 (縄文) a 乗附中原遺跡 (弥生) b 竜見町遺跡 c 高崎競馬場遺跡 d 高閑堰村遺跡 (古墳) e 山上古墳 f 大山古墳 g 大鶴巻古墳 h 浅間山古墳 i 御部入古墳群 j 山名土合古墳群 k 正六古墳群 l 上佐野古墳群 m 下佐野古墳群 n 寺尾東館 I・II・III 遺跡 o 山の上碑 p 少林山台遺跡 q 倉賀野満福寺遺跡 (奈良・平安) r 金井沢碑 s 乗附廃寺 t 上佐野舟橋遺跡 (水田) u 上中居西屋敷II 遺跡 (As-C・Hr-FA・Hr-FP・As-B) v 栄町I 遺跡 (As-A・As-B) w 石原霞田遺跡 (As-B) (中・近世) x 鎌倉街道 y 和田城櫓台跡 z 高崎城乾槽と東門 a a 高崎城城下町遺跡 a b 館の百庚 a c 一里塚

第7図 遺跡分布図



### 第3章 発見された遺構

#### 第1節 遺跡の概要（寺尾中城と調査区）

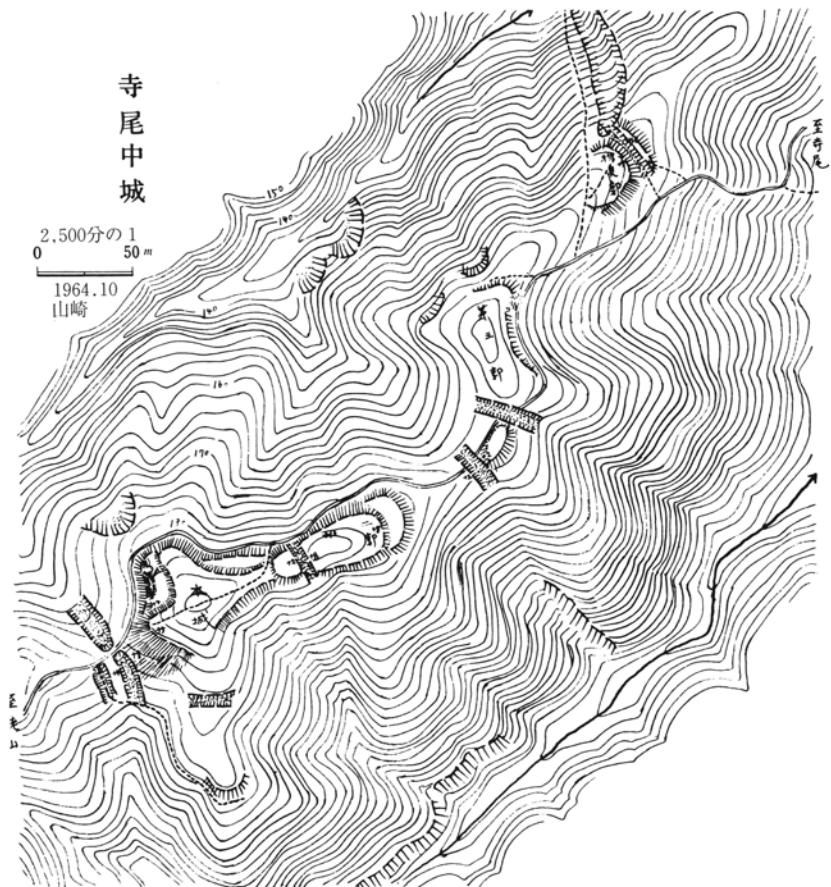
既に述べたように、寺尾中城は南側の衣沢川とその支流である北側の北沢川に挟まれた山稜部に位置している。調査区はその西寄りの一角、掘削対象とされた凡そ標高180m以上の区域に設定されたが、これも既に述べたように、地形的には主たる尾根筋とこれから分岐する2筋の尾根からなっている。この主たる尾根筋は寺尾中城主要部の乗る尾根筋と同じもので、調査区は主郭に当たる本城から尾根筋を150～250m西にたどった辺りに位置している。

山崎一先生によって紹介された寺尾中城は、本城を西端として東に第二郭、第三郭、物見郭という四つの郭が、尾根筋を挟んで断続的に連なる梯郭式の城郭として周知されている。(第8図、山崎一《1976》)この城は城の案内板がある本城西側に二重の堀切、物見郭の東側には斜面と排土を利用した武者溜状の堀切を掘削して尾根から区切っている。城は全長400mで両側斜面は険しく、谷底との比高差は40～50m程を測る。城の中核である本城の北東面と第二郭の東面には腰郭がつき、個々の郭と郭の間、及び本城の南面には堀切が掘削されている。

尚、地表面の観察によって今日では物見郭東の堀切の東130m程の地点にやはり斜面を利用した堀切1ヶ所、本城西側の堀切の西90m付近には二重の堀切、更に100m西の地点にも今回調査を行った堀切1条を確認している。従って現在この城は並郭式の城として分類され、城域は少なくとも遺構の確認される東西780mの範囲、地形的に見ると尾根筋東端までと調査区

西端の頂部までを含めた1km余りの範囲を以て把握できるものと考えられるようになってきている。

寺尾中城はあまり手の加えられていない郭と堀切で構成されるため、南北朝期の特徴を残す城として評価されているが、主城北西側には桁形状虎口が築かれるなど後世の改修と判断される遺構も残されている。一方、例えば本城西側の堀切の上幅が5～6mを測るのに対して今回調査した堀切の幅が3m強であるというように、西方2ヶ所の堀切は本城以東の堀切に対して規模が小さく、また、本城以東の郭が15m程の幅を持って一定の面積を有し且つ平坦であるのに対し、調査区周辺の平坦部は幅10m程を測るものの面としてはやや膨らみがあるなど、全体として本城以東の地域に対して貧弱な印象がある。

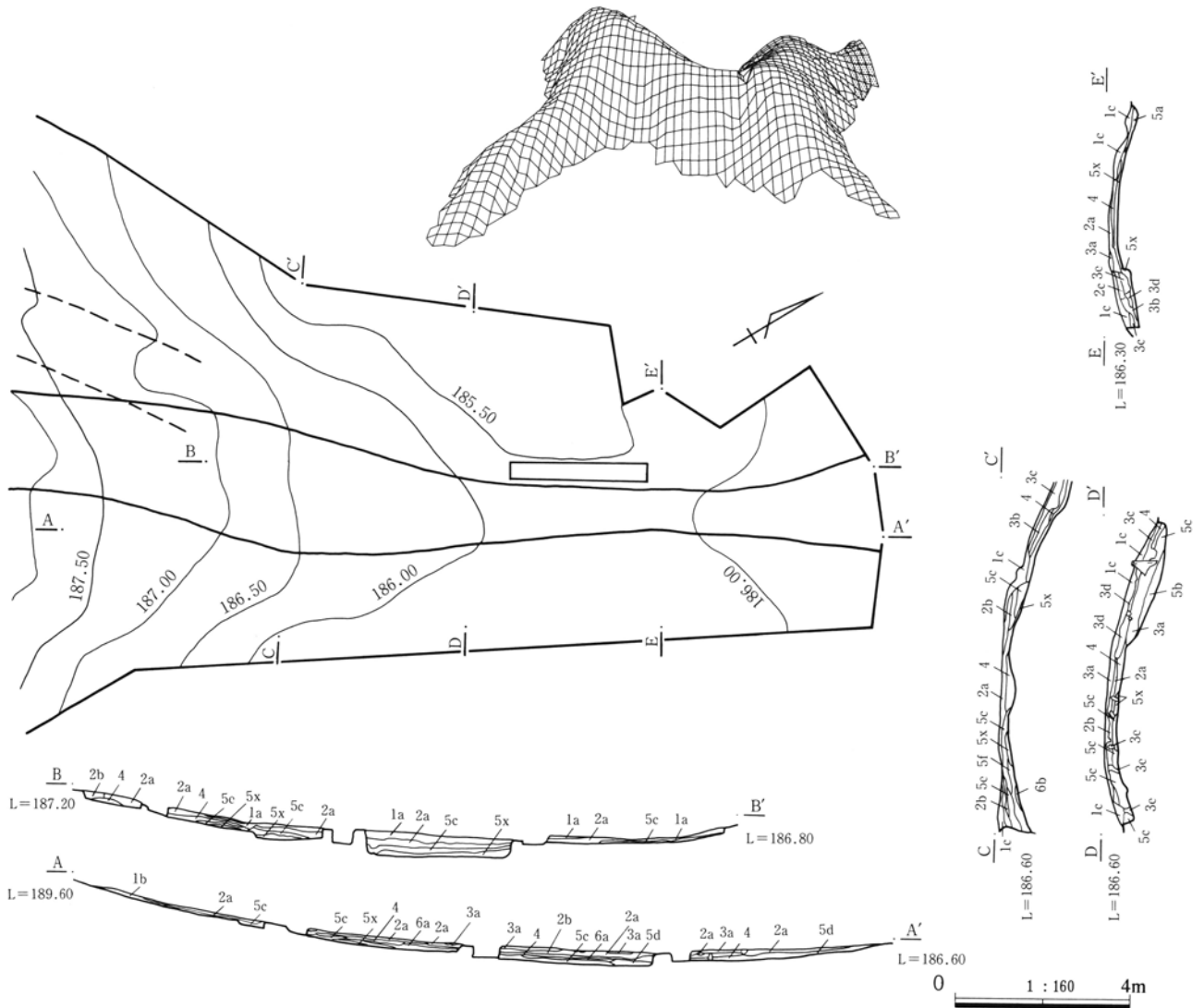


第8図 山崎一先生作図寺尾中城縄張り図

## 第2節 一つ尾根調査区

一つ尾根調査区は調査区全体の中で最も北の本城（第一郭）寄りに在る調査区で、調査区外となる北東側の尾根（以下「東尾根」とする）と二つ尾根調査区に在る、両側の尾根の鞍部に当たる本調査区は平面形に於いても両側の尾根筋に比べて著しく狭くなっている。

調査前、尾根の上は高崎市の遊歩道があったため、戦後の林道設置に伴う上面の切土と両側への盛土の可能性が想定され、北西-南東両側斜面への堀切掘削等の可能性も考えて調査を行った。本調査区に対しては試掘トレンチを尾根の走向に合わせて2本、これに直交させて3本を設定して、人力による掘削



[表土] 1a: 黒色砂質土。 1b: にぶい黄褐色土。 1c: 黒色砂質土。 マット状。

[As-A混土層] (As-A 多く混入) 2a: にぶい黄褐色土。 2b: にぶい黄褐色土: 縞状に砂質土。 2c: 褐色土: 黒色砂質土と多量のAs-A。

[As-A混土層] 3a: 黒褐色砂質土。 3b: 黒褐色土。 3c: 黒色土。 3d: 灰黄褐色土: 黒色粘質土斑。 3e: 黒色砂質土主体。

[As-A層] 4: As-A 一次堆積層。

[As-B混土層] 5a: にぶい黄褐色砂質土。 5b: 黄褐色粘質土。 5c: にぶい黄褐色砂質土。 5d: 黄褐色土: 礫少量混入。 5e: にぶい黄褐色砂質土。 5f: にぶい黄褐色砂質土。 5x: にぶい黄褐色砂質土: 軽石 (As-Bか) 混入。

[その他] 6a: 灰黄色砂質土: 流水痕。小礫混じる。 6b: 明黄褐色粘質土: 鉄少量。

第9図 一つ尾根調査区

を進め、最後にAs-A軽石(1783)層或いはAs-B軽石(1108)混土層下面までを人力で表出していった。

調査の結果、堀の掘削や切岸等の地形はなく、頂部に於ける切土も見られなかった。寧ろ尾根上に於いてはAs-A軽石の混土層が20cm程堆積し、その下位層、特に調査区中程から西側にかけてはAs-A軽石の純層が10cm程度以下の厚さで堆積するなど、旧地表面が良好な状態に保たれていることが確認された。また尾根の中央付近ではAs-A層の下位に10cm程の厚さでAs-B軽石の混土層の堆積が見られ、この土層中に寺尾中城使用時の地表面があることが想定された。

As-A下面或いはAs-B混土面に於ける尾根の幅は尾根中央付近では現道(調査前段階)に対し半分余りに減じ、最も狭い東寄りの箇所では、現道幅2.2mに対し90cmと狭くなっている。一方、As-A

### 第3節 二つ尾根調査区

二つ尾根調査区は、北東側が一つ尾根調査区に接し、南西側が堀切を挟んで四つ尾根調査区と、また南東部では三つ尾根調査区の急斜面と接している。

尾根筋の走向は東部では北東-南西を向くが、中・南部では南北方向に変ずる。尾根幅は尾根頂部で2.5~3m、広く見ても5m程であるが、南端部では頂部で最大9mに広がる。高さも南端部にピークがある。尾根筋は緩傾斜であるが、北東部はやや傾斜がきつくなって一つ尾根に落ちていく。尾根両側の斜面は概してきついが、北西斜面北寄りと東斜面の中程では若干緩くなる。尚、西側斜面中位は林道に、堀切と三つ尾根調査区に挟まれた南斜面上位は林道と作業場らしい方形プランの平場に削られている。

本調査区では尾根筋から斜面上位、及び若干緩やかな傾斜面を見せた北西斜面とこれに続く西側斜面の中位までのAs-A層を除去した後、尾根の頂部付近を中心にかなり丁寧<sup>じきよう</sup>に遺構確認を行ったのであるが、後述する南のピークの部分と北東斜面の現道下部分を除いて多くの箇所では削平や切岸や地形等

層下面に於いては幅93cm深さ15cm程の溝状の落ち込みが二つ尾根調査区北側斜面の現道付近から流れ込み、本調査区中程で消えているのが確認された。この溝状の落ち込みには二次堆積と判断されるAs-A軽石が充填していた。

#### [小考]

以上のように中・近世段階での一つ尾根調査区は、その幅が最小90cmと狭い瘦せ尾根であり、東西両側の尾根筋からは現状より更により20~30cm低く落ち込んでいた。また南北両側の斜面に切岸等の地形はなされないものの傾斜はきつく、一つ尾根は形態的に天然の土橋といった状態を示していた。

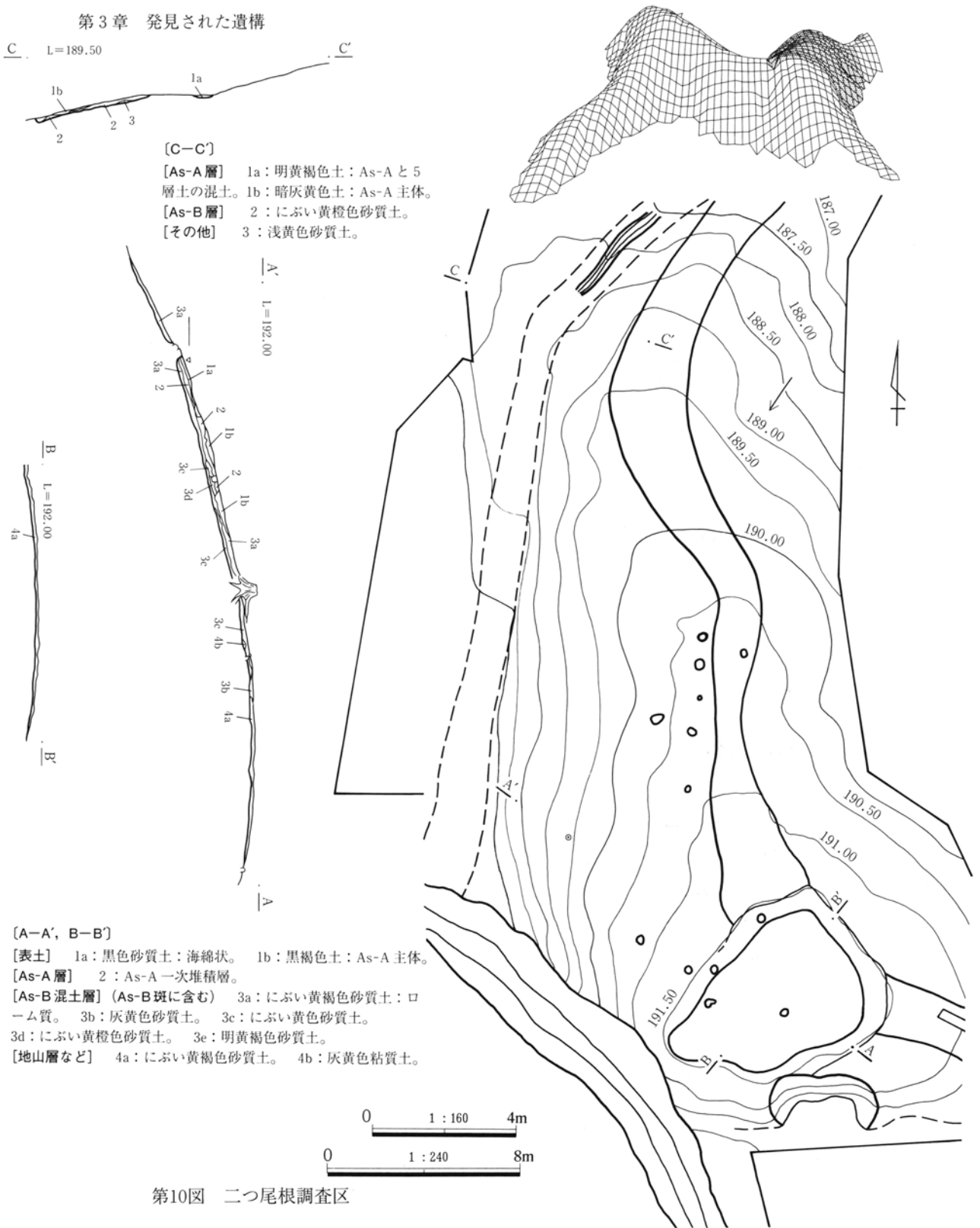
尚、調査区西部のAs-Aの充填した溝状の落ち込みについては、本城方面への通路としてAs-A降下段階で現道の下敷きとなる道路であった可能性が考えられる。

の痕跡、或いは溝や道路の硬化面などを確認することはできなかった。また東側斜面には縦方向に落ちる溝状の窪みがあったため、堅堀の可能性も考慮に入れて注意し乍ら確認作業を行ったのであるが、これらは土砂崩れの痕跡であることを確認した。

さて、二つ尾根調査区南部の地域は二つ尾根だけでなく、調査区堀切以東の調査区の中にあっても最も高い部分である。ここは基盤層が砂礫質からローム質へと変わる地点で、北東-南西方向に835cm、北西-南東方向に590cmを測る隅丸台形様のプランを持つ弱い膨らみを有する平坦面が見られる。この平坦面の南東から北東にかけては20cm程の段差を以て最大幅2.8mを測る腰郭状の平坦面を伴うが、北から入る尾根の上面も同様の段差があつて平坦面と区切られている。尚、こうした表面の凹凸はAs-A降下以降には見られなくなっている。

上述の平坦面付近ではAs-B混土層の遺存は明瞭ではなく、As-A層除去後まもなく基盤層である礫混じりのシルトが表出するため遺構確認にやや手間

第3章 発見された遺構

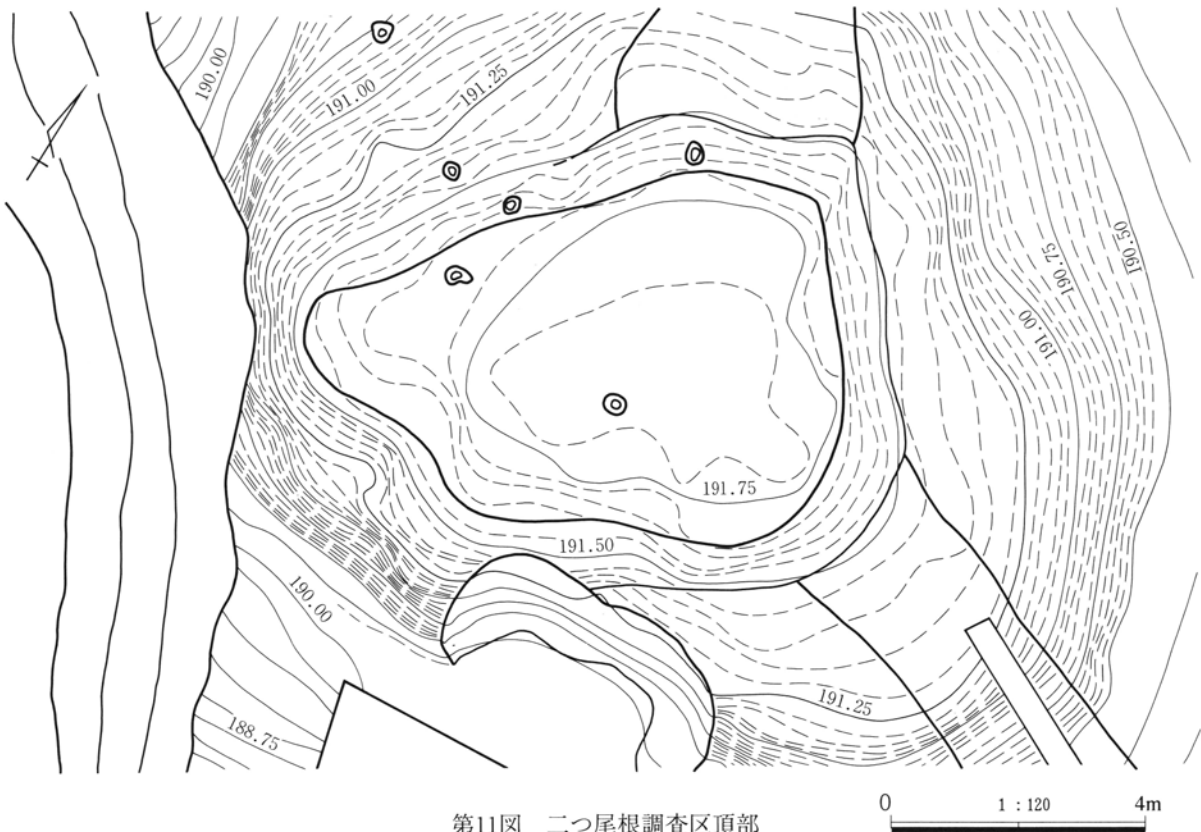


第10図 二つ尾根調査区

取ったが、柱穴や杭の打設痕、土塁の痕跡等は認められなかった。但し平坦面の南東側中央部の縁辺に近い位置に165×115cmの範囲で瓢箪形プランの焼土面が確認された。この焼土面は層位的には地表から15~20cm以上下位の表土層・As-A層下にあること

から、近年のものではなく、As-B混土層形成時期の所産として判断されるものである。

一方、北西斜面部の現道下では、現道の走向に沿ってAs-A混土が充填した、幅50cm、深さ6cmを測る浅い溝遺構が5m程の長さで確認された。



第11図 二つ尾根調査区頂部

## 〔小考〕

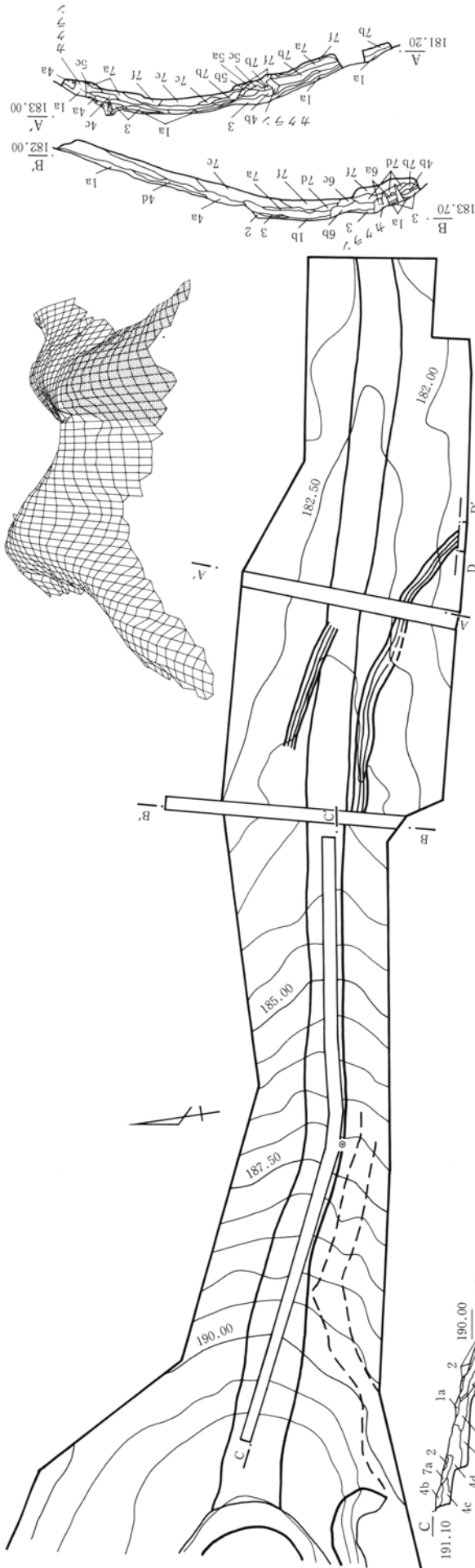
上述のように本調査区では南端の最も高い部分に、東側に腰郭状の平場を伴い20cmの段差を有する隅丸台形様のプランの平場が削り出されたように設けられていた。しかし本遺跡では基盤層が褶曲した状態で、しかも浅い位置に表れて且つ崩落が多いため、この平坦面が人為的に削り出されたものであるか否か断定することはできないが、この平場の南西側が堀切に接する防御上重要な箇所であること、平場東部の平場の形態を意識したような位置に焼土面が見られること、そしてこの段差の状態が周囲に見られる（崩落に伴うような）自然の段差とは異った状態・形状を示すことなどから、人為的に削り出されたものである可能性が高いものと判断するものである。

ところでこのように上述の平坦面は郭的遺構として認識するものであるが、南西側は堀切に接しており、南・東・西側の斜面は自然面であるが、傾斜がきついことから防御機能を自ずと持っている。しかし建物の痕跡はなく、堀切や北接する尾根筋、そし

て南の三つ尾根調査区の斜面際にも土塁や柵列等の防御施設の設置の痕跡は全く認められなかった。一方、平坦面東部に焼土面が見られることから、臨戦態勢の有無はともかく、人の配置された時期があったことが窺われる。

また、東斜面北寄りの傾斜面は古い崩落によって尾根筋より一段低くなる一角がある。（第10図矢印部分）自然地形であるこの部分へは、一つ尾根調査区（本城）側からは水平に近いイメージで入ることができ、ここから尾根筋へ上がるには正面の急傾斜面を見て右に折れて1m程斜面を昇ることになる。この箇所は一・二つ尾根調査区境の尾根筋の斜面に対し入り易く、調査区境の尾根を封鎖された場合は尾根筋へ上がるルートとして適しているため、自然地形であるが、虎口の機能を有している。

一方、東部北斜面に於いては、溝状の遺構が確認されているが、これについては林道敷設以前の道路の存在が考えられる。この道路は狭い山道で、近世後期以降の所産と想定される。



(C-C'セクション) (斜字は崩落の可能性のある地山層)

[表土] 1a: As-Aに腐葉土入。 1b: 黒褐色砂質土。 2: As-A。  
 [地山層-粘質土] 3a: 浅黄色土。 3b: 明灰緑色土; 8c層土入る。  
 3c: 明黄緑色土。

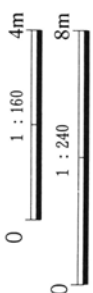
[地山層-ローム質土] 4a・4f: 浅黄色土; 川砂と円礫含む。 4b: にぶい黄橙色土。 4c: 明黄褐色土。 4d: 明黄褐色土; 大型礫多し。  
 4e: にぶい黄色土; 円礫多し。 4g: 浅黄色土; 川砂・円礫や多し。  
 [地山層-シルト] 5a: にぶい黄褐色土; 円礫や多し。 5b: 明黄褐色土・5c: 浅黄色土; 円礫含む。 5d: 明黄褐色土; 砂岩多く含む。 5e: 灰黄褐色土; 川砂多く円礫混入。

[地山層-混土] 6a: 浅黄色砂質土と黄橙色土主体。 6b: 砂礫と黄橙色土。 6c: 浅黄色砂質土と小円礫。 6d: 大円礫と灰黄色砂質土。  
 [地山層-砂質土] 7a・7c・7i: 浅黄色土; 川砂と小円礫多く混入。  
 7b: 黄褐色土; 川砂・円礫や多く混入。 7d: 明黄褐色土; 砂岩多し。 7e: 黄褐色土・明黄褐色土; ややローム質。 7f: 灰白色土; 円礫含む。 7g: 明黄褐色砂質土/7h: にぶい黄褐色土; 川砂多く円礫混入。  
 [地山層-砂礫層] 8a・8b: にぶい黄褐色土。 8c: 浅黄色砂岩主体。 8d: 黄褐色砂岩主体。 8e: 円礫; 明黄褐色土入る。

(D-D'セクション)

[表土など] 1: 黒褐色土; 髭根入る腐葉土層。 2: As-A。  
 [As-B混土相当] 3: 明黄褐色砂質土; 川砂・小円礫混入。  
 [溝溜土] 4: にぶい黄色砂質土; 地山混土。円礫混入。  
 [地山層] 5a: にぶい黄褐色土; ローム質土主体。 5b: 黄褐色土; ローム質土主体。 やや砂質。 5c: 灰黄褐色砂質土; 部分的に円礫多く混入。

[A-A', B-B'セクション]  
 [表土] 1a・1b: 黒色砂質土; 海綿状。 As-Aやや多く含む。  
 [As-A混土層] 2: 黒色砂質土主体。 3層に比し縮まる。  
 [As-A層] 3: 一次堆積層。層下位に灰色火山灰も見られる。  
 [As-B層] 4a: 明黄褐色土/4b: 4a・7a層土の混土; 軽石(As-Bか)・川砂・小礫含む。 4c: にぶい黄褐色砂質土; As-B・細礫含む。 4d: 黄褐色砂質土; 軽石(As-Bか)入る川砂多く含む。 円礫若干混入。  
 [溝溜土] 5a: にぶい黄褐色砂質土; 細砂(As-Bか)多く混入。 5b: 明黄褐色砂質土; 4a層に似るが円礫多し。 5c: 浅黄色砂質土; 細礫多く含む。 5d: 浅黄色砂質土; 川砂・円礫多し。 5e: 浅黄色砂質土; 7a層のプロック層。  
 [段差層] 6a: 浅黄色土; ローム質。川砂・円礫含む。 6b: 4b・6c層土の混土。 6c: 黄褐色砂質土; 川砂・As-B多し。  
 [地山] (円礫と川砂多く混入) 7a: 灰黄色砂質土。 7b・7c: 浅黄色砂質土。 7d・7e: にぶい黄褐色砂質土。 7f: 円礫・川砂と明黄褐色砂質土の混土。



第12図 三つ尾根調査区

## 第4節 三つ尾根調査区

三つ尾根調査区は西端で二つ尾根調査区に接し、西半の急傾斜部分と、東半の比較的平坦な部分とに分かれる。調査は東端に掘削深度確認のための試掘トレンチを掘削することから着手した。

西半部の急傾斜面では棚状の凹凸が散見され、腰部等の存在も念頭に縦方向に試掘トレンチを設定したが、これらは基盤の層と層の境に生じた崩落などによるもので人為的なものではなかった。また、西半部との境に堀切などが掘削されることはなかった。

一方、東半部は頂部で幅3m程を測ったが、尾根を横断するトレンチを設定して断面を観察したところ尾根筋は幅1.8mを残して両側が高さ40～50cm程で崩落、或いは削平されていた。また南斜面寄りの断面に見られU字状の落ち込みを面的に広げたところ、上幅55cm、尾根側で深さ50cmを測る溝を12m程の長さで確認した。この溝は急斜面との境から尾根筋に沿って東流し、走行を南東に変じて南斜面

を調査区外に出ている。また北斜面寄りにも幅50cm程の溝を5m程の長さで確認した。

### 〔小考〕

上述のように三つ尾根調査区の西半部は自然の急斜面であり、東半部は緩傾斜の尾根筋が伸びており、何れもAs-A降下以前、As-B降下以降の所産である溝と尾根両側の段差を確認した。

このうち溝は尾根筋の雨水を排水する機能を持っていたものと想定される。しかし北側のものはやや不明瞭で、南側のものは形態的には人為的であるようにも思われるが、谷への流入の状態から考えて、人為的か否かは特定できなかった。

段差については例えば西半部の崩落などと形状が異なり、尾根筋両側に見られること、そして他の尾根筋にこうしたものが見られないことから、人為的なものである可能性を考慮したい。この場合、段差は尾根の頂部を狭める効果を持つことになる。

## 第5節 四つ尾根調査区

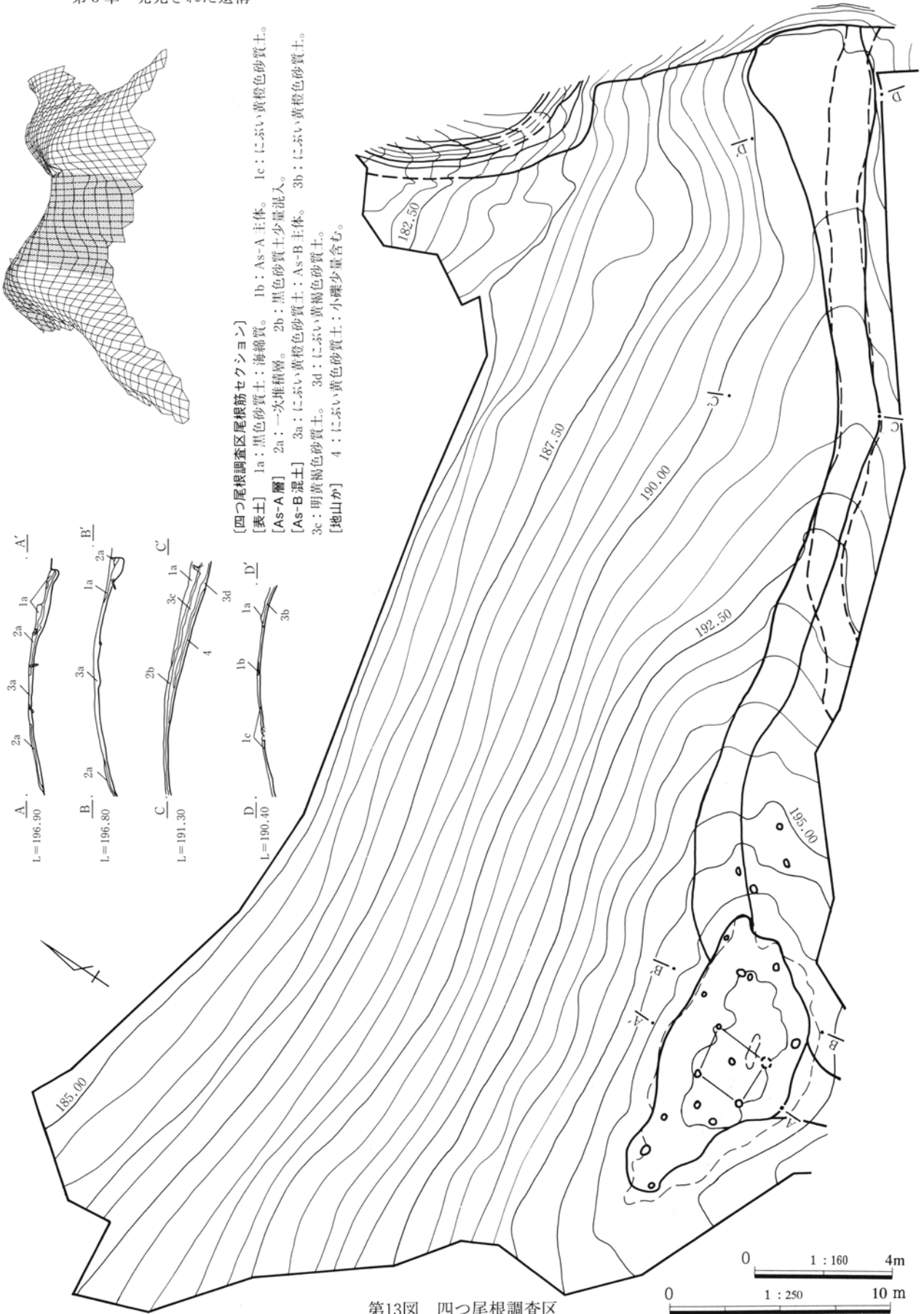
本調査区は主たる尾根筋の西端にあり、東を堀切を挟んで二つ尾根調査区、南に五つ尾根調査区と接し、南・西・北側の斜面は急傾斜であった。

尾根筋の東部は、本調査区西部と二つ尾根調査区の頂部の間にあつて鞍部に当たる部分である。しかし二つ尾根調査区との間に尾根筋としての連続性がないこと、ほぼ全域でAs-Aの堆積が見られるのに対し西寄りのC-C'セクションに見られた尾根頂部のAs-B軽石混土層が堀切寄り（東寄り）のD-D'セクションで見られないことから、堀切際の一角が削平されていることが確認された。尚、現代の道路面を除き上記以外の遺構は確認されなかった。

尾根筋中部は西の平坦面と東の緩傾斜の尾根筋を繋ぐ東に下る急傾斜の自然面で、西部寄りに時期の新しいものを中心とする小ピットなどを見た他は、特段の遺構等を発見することはできなかった。

西部は頂部にあり、特に削平等の痕跡は認められなかったが、径17～51cmで平均 $29 \pm 5$ cm、深さは17～36cmで平均 $23 \pm 5$ cmを測る11基の小ピットを確認した。このうち2基（2・12）はAs-Aの充填する江戸時代後期以降の所産であり、その他は時期不特定の2基（3・5）を除き、それ以前の所産である。これらのうちピット5・6・8はその位置から1間×1間の建物跡である可能性を有するが、南東隅のピットについては該当部分に掘削の可能性を示す土壌の乱れのある箇所（破線）はあったものの確認することはできなかった。この他のピットに柵列等を見出すことはできなかった。

南・西・北側斜面のうち北側斜面については地表面に凹凸が散見されたため、城外への通路の遺存も考えて表土・As-A等を除去し遺構確認を行ったが、何ら遺構等を確認することはできなかった。



〔四つ尾根調査区尾根筋セクション〕

〔表土〕 1a：黒色砂質土；海綿質。 1b：As-A主体。 1c：にぶい黄褐色砂質土。

〔As-A層〕 2a：一次堆積層。 2b：黒色砂質土少量混入。

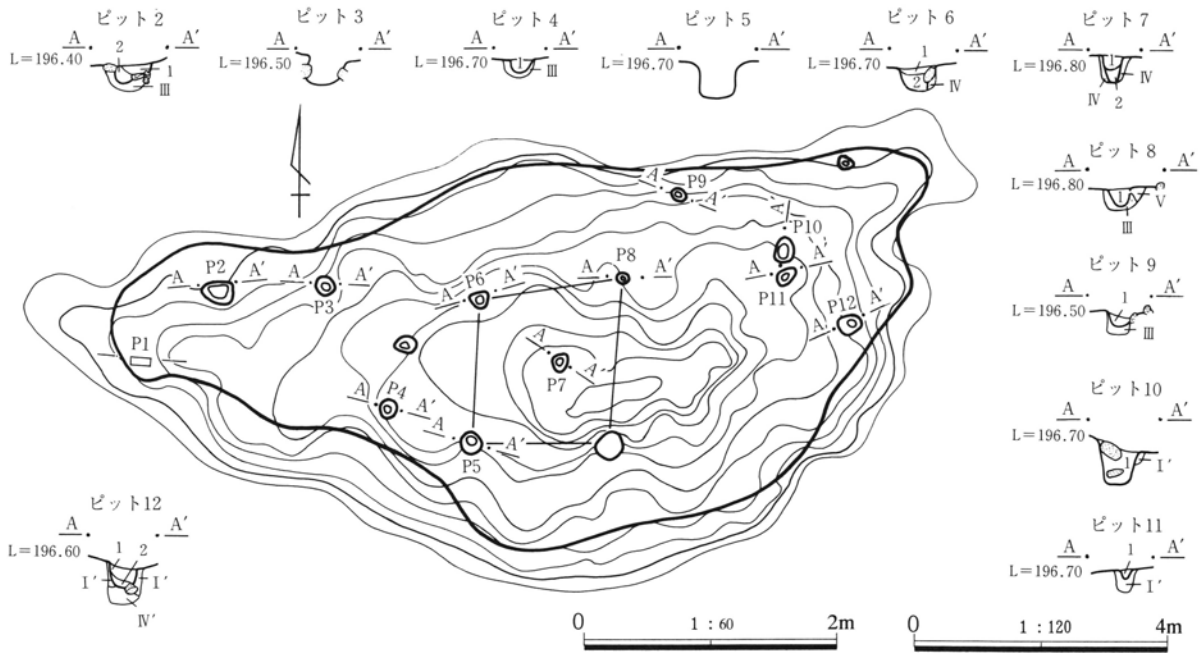
〔As-B混土〕 3a：にぶい黄褐色砂質土；As-B主体。 3b：にぶい黄褐色砂質土。

3c：明黄褐色砂質土。 3d：にぶい黄褐色砂質土。

〔地山か〕 4：にぶい黄色砂質土；小礫少量含む。

第13図 四つ尾根調査区





〔四つ尾根調査区ピット群セクション〕

〔ピット2〕 1：As-A。 2：地山Ⅲ層土ブロック層。

〔ピット4〕 1：ピット2-2層に似るが締まる。

〔ピット6〕 1：浅黄色砂質土：川砂多く、円礫若干混入。

2：黄褐色砂質土：川砂多く混入。

〔ピット7〕 1：にぶい黄橙色土：小円礫多く締まり欠ける。

2：にぶい黄橙色土：円礫混入。良く締まる。

〔ピット8〕 1：浅黄色土：円礫混入。

〔ピット9〕 1：にぶい黄色砂質土：小円礫・二次的As-A入。

〔ピット10〕 1：浅黄色砂質土：川砂円礫多く混入。

〔ピット11〕 1：にぶい黄褐色砂質土：樹木根の痕跡の可能性。

〔ピット12〕 1：As-A層。 2：明黄褐色砂質土：地山Ⅰ'・Ⅵ'層の混土。

〔地山層〕 Ⅰ：明黄褐色土：ローム質で円礫含む。Ⅰ'：円礫多く混入。Ⅱ：黄橙色土：円礫少ない。Ⅲ：浅黄色土：円礫混入。Ⅳ：にぶい黄橙色土：ローム質で円礫混入。Ⅳ'：円礫少ない。Ⅴ：黄色土：ローム質で円礫含む。

ピット番号	径(cm)	深さ	備考
ピット2	51×37	22	As-A混入
ピット3	31×29	22	覆土不詳
ピット4	29×28	17	
ピット5	33×32	27	建物を構成

ピット番号	径(cm)	深さ	備考
ピット6	29×25	21	建物を構成
ピット7	27×27	22	
ピット8	18×17	18	建物を構成
ピット9	22×19	18	

ピット番号	径(cm)	深さ	備考
ピット10	40×32	36	
ピット11	32×21	18	樹木痕か
ピット12	34×30	31	As-A混入

(単位：cm)

第14図 四つ尾根調査区頂部

〔小考〕

以上のように四つ尾根調査区では尾根筋中部と南・西・北側の急斜面については遺構や地形の痕跡などを確認することはできなかったが、尾根筋東部と西部に地形や遺構の痕跡を確認した。

このうち尾根筋東部では堀切際の一角が削平されていたが、その範囲は堀切際から鞍部の中心と想定される北斜面に見られた谷地形奥部までの凡そ11mの区間と判断される。そこでこの位置と二つ尾根調査区のピークとを繋いで尾根筋の復元を行ったところ、掘削の高さは堀切際には1m程を測り、凡そ196.5m<sup>3</sup>程の土砂を掘削していたものと想定された。尤も第3節で述べたように二つ尾根調査区のピークは削平された可能性があるため、その掘削の高さと

土量はずっと増える可能性を有する。尚、掘削時の排土の処理についてはつまびらかでないが、後述する堀切際の状況などから南側を中心とする斜面に投棄したのではないかと思慮される。

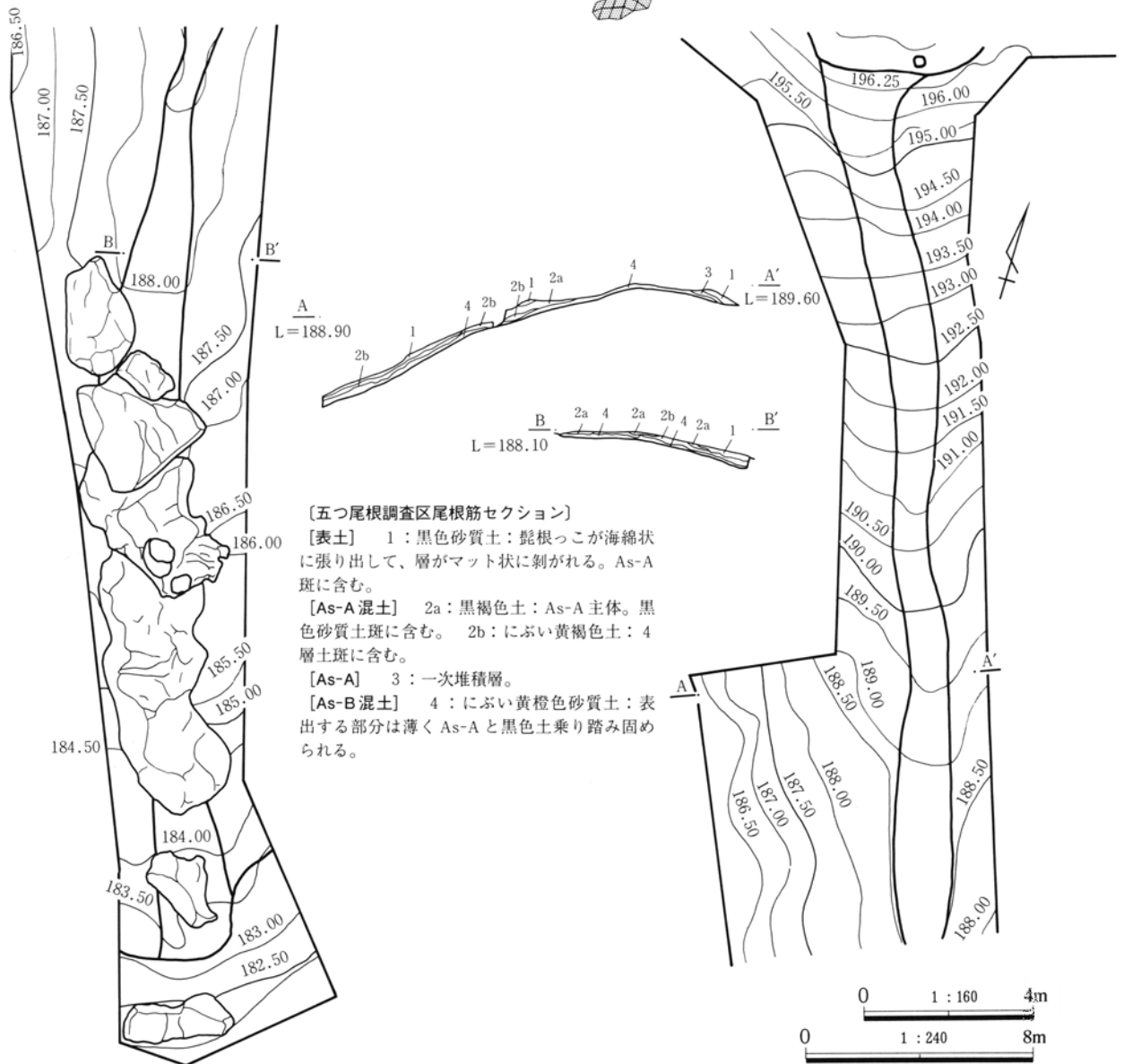
一方、西部のピークには小ピット群を確認し、1棟の建物を想定した。この建物は1間×1間の方形プランの杭基礎構造を持つもので、1辺が230cm程を測る。基礎の径は27±6cm（以下）と比較的太いものの打ち込み深さは22±6cmと浅く、比較的簡易な構造で且つ臨時的な建築物であったと想定される。用途は不明だが、物見としてはかつては西により高い土地が続いていたため適さないが、北西90mの7m程高いピークと併せれば北側眼下の道路を監視した施設としての可能性が考えられる。

## 第6節 五つ尾根調査区

本調査区は遺跡西南部に在って北に四つ尾根調査区と接する。南南東方向に伸びる尾根筋は、四つ尾根調査区際は急だが直ぐに緩傾斜となる。東西両側の斜面は急で、特に東斜面は滑落の危険すらあった。

南端には腰郭状の段差が見られたが、調査の結果、周囲に良く見られる自然崩落痕であることを確認した。一方、北端の急斜面には三つ尾根調査区の西半部で見たような凹凸があったが、これも自然の崩落によるものであることを確認した。

さて本調査区の大半を占める尾根筋の緩傾斜部分はAs-Aがしっかりとした状態で残っていたため、天明3年(1783)の地表面を比較的容易に表出することができた。南部には砂岩の岩盤がそのまま露出



第15図 五つ尾根調査区

し、As-B 混土の堆積も見られなかった。一方、中・北部は As-A 層下に As-B 混土層が薄く堆積しているのを確認したが、尾根を横断するラインは円弧状を呈していた。尾根頂部の幅は調査前 3～4 m を測ったのに対し、As-B 混土下面では 1～2 m と狭く、痩せ尾根であったことが分かる。また調査区の中程、西側斜面に窪地が見られたが、これも自然の

## 第7節 堀切

堀切は二つ尾根調査区と四つ尾根調査区の境にあって、本遺跡の中で最もはっきりした遺構である。第1章第3節で述べたように堀切部分の掘削は北斜面の表層部分を除いては人力で行ったのであるが、特に南斜面は急斜面で進入路もなく、加えて排土の下方への投棄を避ける必要もあったため、土砂は尾根筋へ引き上げなければならなかった。この際バックホー等の投入は勿論、ベルトコンベアですら設置は不可能で、北側斜面までの土砂の運搬は全て人力で対処しなければならなかった。

堀切はしっかりした掘削形態を持つ薬研状の箱堀で、全体として良好な遺存状況にあった。プランは縦に細長い S 字形を呈しているが、掘削ラインは多くは直線的であるものの、北部のみ曲線的で形態的にも中・南部に比して若干丸みを帯びている。堀切の底面は尾根両側に段差を持ち、段差から傾斜がきつくなって南北両斜面を下り、それぞれ調査区外まで達している。

以下、南側の段差以南の区域を「南部」、北側の段差以北の区域を「北部」、その中間、尾根の部分を「頂部」として記載する。

### 〔南部の調査〕(第17図)

南部は調査前若干谷状に窪んではいしたが、その状況は他の斜面部と大差なかった。しかしこの辺りの土壌の堆積状況を観察すると、As-A 軽石降下時点までは堀切の窪みが明瞭であったことが窺われる。その下位層、As-B 混土層は東西両側の土壌へと繋がる傾向にあったが、この部分は締まりに欠け、調

谷地形であることを確認した。

### 〔小考〕

以上のように、五つ尾根調査区は全くの自然地形で痩せた尾根であった。南部の岩盤は As-A 降下時点では露出した状態にあったが、As-B 混土などが確認できなかったことから恐らくは中・近世を通して同様の景観を見せていたものと思慮される。

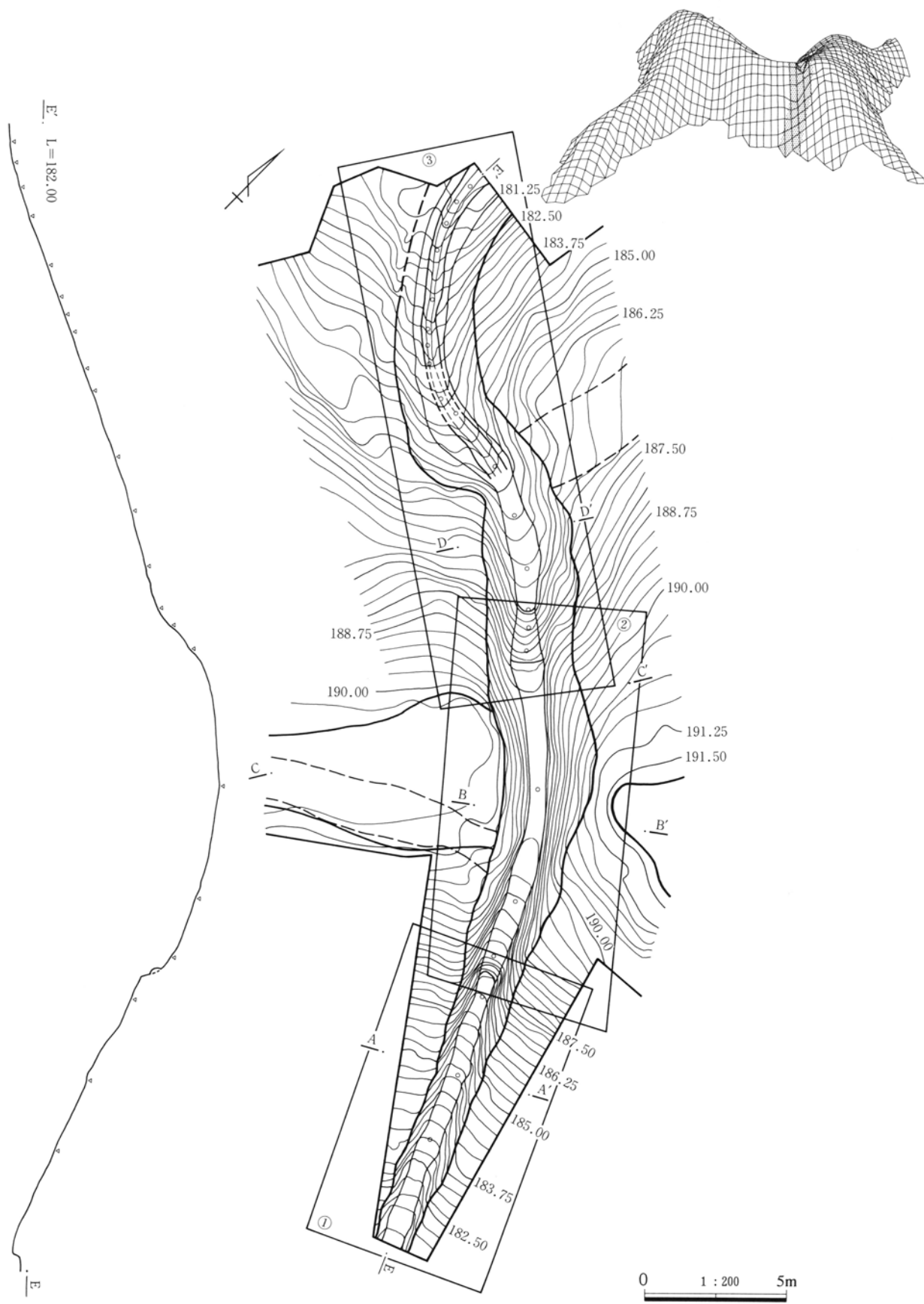
査に於いて表土層・As-A 層と一括して掘削したこととも相まって堀切壁面上位の表出を難しくしている。特に西側斜面の中程に於いてその感が強い。堀切の壁面及び底面に現れた地山層は北寄りでは礫が多く混ざるが、中程から南に向かっては礫の量が減じてローム質のシルトに変じている。このため堀切の壁面の中位から底面にかけての表出は比較的容易であった。

堀切の形態は箱堀状で、確認面での上幅は 210～125cm、底幅は 50～85cm、深さは確認面から 60cm 程を測り、平面距離で 10.5m を調査した。堀切の走行は南南東を向き、底面は比較的平らであるが頂部との境に段差を有している。この段差の高さは僅か 1 m 程のものではあったが、底面が 25°前後の傾きを持つため頂部側に上がるのは容易ではない。尚、礫が崩落したものか、段差の前面には径 40cm、奥行き 12cm 程の窪みが見られた。

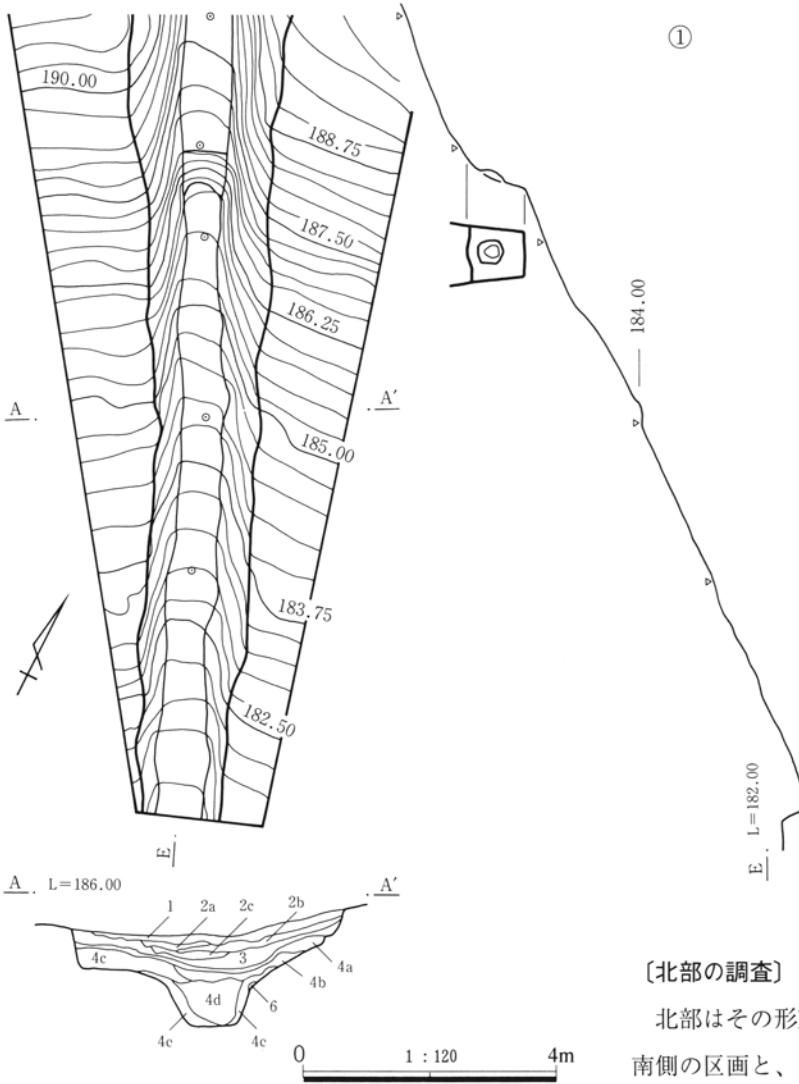
### 〔頂部の調査〕(第18図)

頂部は調査前から堀切の形状を示していたが、調査前、戦後の林道敷設のため掘削したものだという情報もあった。しかし掘削により北側 C-C' セクションの 1b・1c・1d 層下面がこれに該当することを確認した。この部分を除けば As-A 軽石層も良好な状態で認められ、堀切の壁・床面も傷つけられてはいなかった。尚、地山層は南側は砂礫層で、北側はローム質のシルトであった。

頂部は 10.5m 程で、壁面と床面は共に比較的平らに削り出されていた。縦方向の底面形態は全体に



第16図 堀切全体図



〔A-A'セクション〕

〔表土〕 1：黒色砂質土：髭根っこにより海綿質。

〔As-A混土〕 2a：As-Aと黒色砂質土の混土。 2b：暗褐色土：As-A主体に黒色砂質土斑に混在。 2c：暗褐色土：As-A主体に黒色砂質土少量混在。

〔As-A〕 3：一次堆積層。

〔As-B混土〕 4a：にぶい黄橙色土：小礫少量含み締まる。 4b：にぶい黄橙色土：小礫少量含み締まる。4a層に比し暗い。 4c：にぶい黄橙色土：礫斑に含み締まりはあまりない。 4d：にぶい黄橙色土：礫斑に含む。4c層に比し礫大きく且つ多く、締まりに欠ける。 4e：明黄褐色土：地山層土少量混入。西側に礫少量混入。

〔地山〕 6：黄橙色土：礫あまり含まない。

第17図 堀切南部

緩やかな弧を描いている。即ち尾根筋頂部付近では1m程は平らで、南方向へは当初10°、段差に近くなると20~25°、北方向へは当初は5°、段差近くでは10~20°の傾斜を見せている。この底面の傾斜と、頂部に於ける堀切のプランが東に張り出す弓な

①

りの形状を呈することが重なって、一方の段差付近に立つと反対側の段差付近を見通すことはできなかった。

規模は、上幅で240~320cm、底面の幅で60~115cmを測るが、南寄りの一角に比べ中央から北寄りの一角の規模は少し大きくなる。また頂部は二つ尾根・四つ尾根の両調査区に接するが、第5節で述べたように両調査区間には段差があるため西側肩部が東側より120~130cm低くなり、堀切の深さは頂部中央付近で東側の肩に対しては250~260cm、西側の肩に対しては150~210cm程を測った。

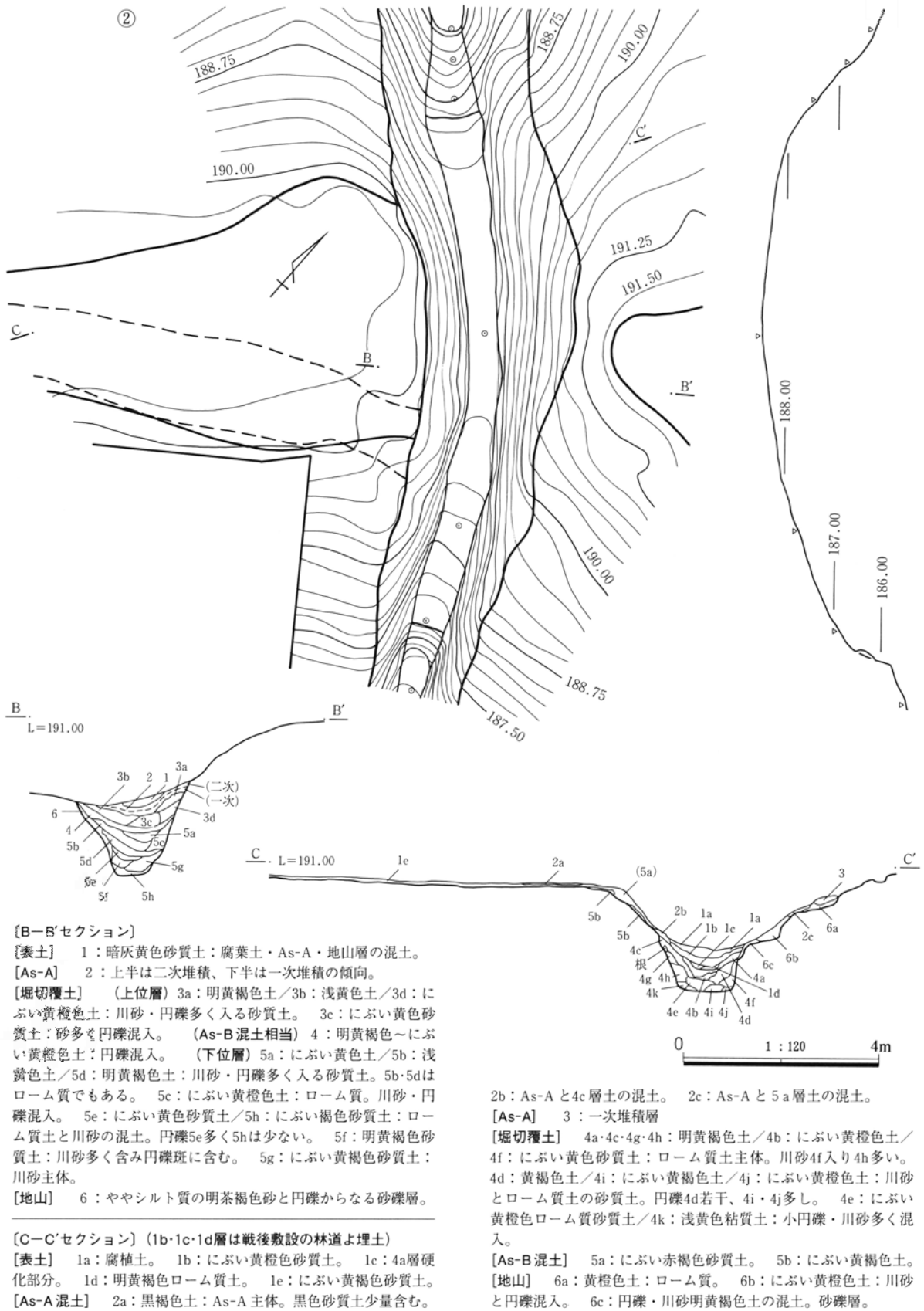
尚、B-B'セクション南のAs-A層下30cmに当たる位置から焼土と共に炭化材片が出土した。

〔北部の調査〕 (第19図)

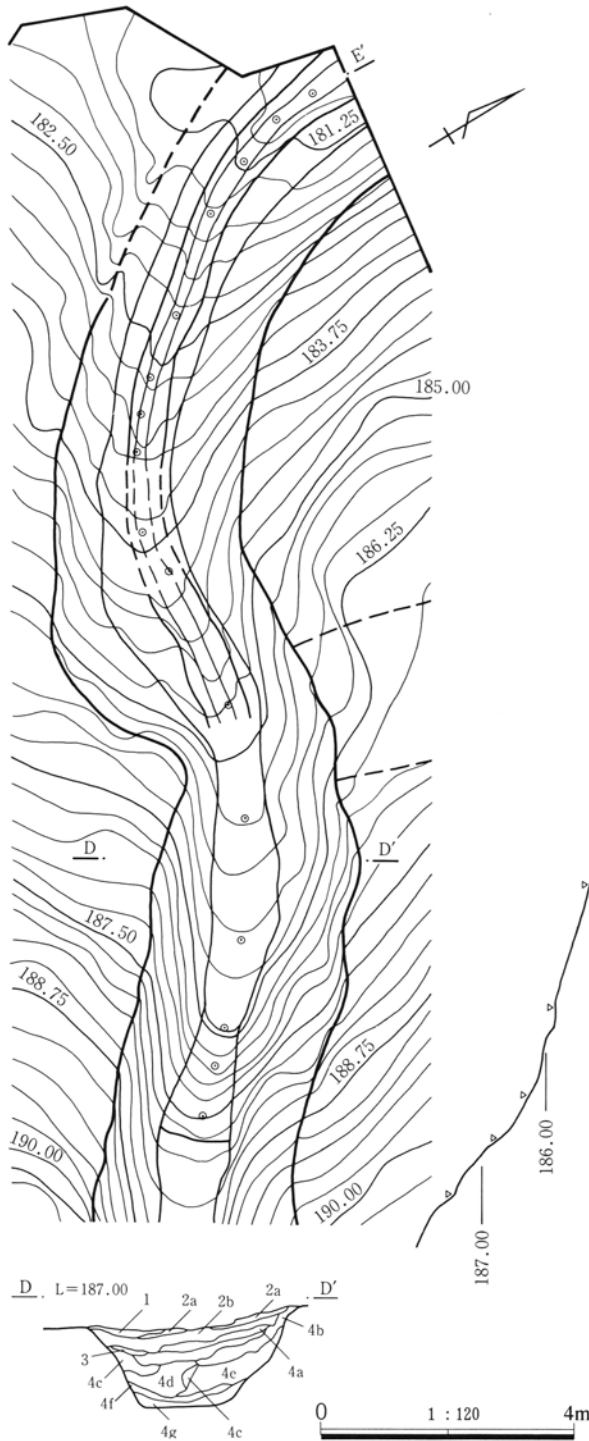
北部はその形態から頂部に続く堀切の形態を残す南側の区画と、これとは異なった形態を示す中程から北側の区画とに分かれる。

このうち南側の区画は長さ6m程で、その走行は頂部から続き、1.6m程北寄りで若干西寄りに変ずる。区画の南端には前面の傾斜角が南斜面の段差に比べて緩やかな50°を示す高さ170cmの段差が見られる。掘り方はしっかりしているが東壁は若干丸みを帯び、底面の傾斜は17°程、上幅230~320cm、基底幅70~110cm、深さ70~140cmを測る。尚、現道際の下位層から炭化物が出土している。

北側の区画は長さ12m程で、プランは西に張り出す弓なりの形状である。壁面の傾斜も以南の堀切に比して緩やかで、西壁裾部も丸みを帯びる。底面の傾斜は20°程で、中央には幅50~70cm、深さ15cmの溝が縦位に掘削される。上幅260~340cm、底部幅100~160cm、深さ1mを測った。



第18図 堀切頂部



[D-D'セクション]

【表土】 1：黒色砂質土。

【As-A混土】 2a：黒褐色土／2b：黄褐色土：As-A主体。

【As-A】 3：一次堆積層

【堀切覆土】 4a：にぶい黄褐色砂質土／4d：にぶい黄褐色砂質土：As-B斑に混入。 4b：明黄褐色土／4e：にぶい黄褐色砂質土：ローム質で軽石(As-Bか)混入。4bは黄色粘質土、4eは多量の川砂混入。 4c：にぶい黄褐色砂質土主体。 4f：黄褐色砂質土：黄色粘質土ブロック少量含む。 4g：灰褐色粘質土：小礫斑に含む。

第19図 堀切北部

③

【小考】

堀切は規模は小さいがしっかりした掘り方を有するものであった。頂部両側の段差付近に立つと底面が傾斜し、堀切のプランが弧を描き、更に両側の壁が立ち上がるため、反対側を見通すことができず回廊のような景観（口絵カラー写真）を目にすることになる。

頂部覆土の観察からは内郭側（東側）の土塁設置の痕跡は認められなかった。

第18図B-B'セクションの5c・5g層は東からの崩落土であるが、寧ろ肩部地山層の崩落土と判断され、同様に5b・5d・5e・5f層は西側地山の崩落土と思われる。従って従来の堀幅は2.6m程の狭いものであったものと想定される。

頂部両側の底面には段差を造っている。この段差はさして高いものではなかったが、堀切内の行き来を遮断しており、両側の底面の傾斜が強いこともあって頂部側への進入は困難を伴った。

一方、南斜面に於いては上位部分に崩落が見られた。この崩落土はAs-B軽石を含んでおり、地山層が比較的安定していたのと併せて、これらが堀切の掘削及び堀切西側（四つ尾根調査区）の削平による排土ではないかと想定するものである。

北部北半は上述のように、他の堀切部分とは異なった形状を見せている。プラン等は自然の谷地形のように見受けられるが、底面或いは壁面の状態は人為的なものである。従ってこの一角は自然の谷地形の壁及び底面を整えて堀切の一部に取り込んだもので、段差以北の走行の屈折や湾曲は谷と堀切を繋いだことを示したものではないと思慮される。尚、谷中央の小溝は導水のためのものと判断される。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

#### 1. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム(カーバイド)を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管(400cc)を用いて、 $\beta$ -線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には14Cの半減期としてLibbyの半減期5,570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の $\beta$ -線計数率と自然計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、 $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の $\beta$ -線計数率と現在の標準炭素(Modern standard carbon)の計数率との差が $2\sigma$ 以下の時は、Modernと表示し、 $14C(\text{Sample})/14C(\text{Modern})$ の値を付記し、 $14C(\text{Sample})/14C(\text{Modern}) < 1$ であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の14C濃度が一定で半

減期が5,568年として算出された14C年代値(yrBP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の14C濃度の変動および半減期の違い(14Cの半減期 $5,730 \pm 30$ 年)を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の14C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program 1999\* REV4.1 [Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40: 1041-1083]を使用した。なお、交点年代値は14C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 $1\sigma$ 年代幅は14C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で $1\sigma$ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を\*\*\*またはModernと表示する。また、AD1,955\*はModernを意味する。

#### 2. 放射性炭素年代測定結果

測定 No.	試料	$^{14}C$ 年代値	補正暦年代値
PLD-516	炭化物(マツ属) 堀切	Modern (1.01276 $\pm$ 0.00952883)	交点年代値 Modern
			$1\sigma$ 年代幅 *****
PLD-517	炭化物(マツ属) 堀切内最下層	Modern (1.00249 $\pm$ 0.0106642)	交点年代値 Modern
			$1\sigma$ 年代幅 *****

#### 引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999\* REV4.1, Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington.

\*To be used inconjunction with: Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993). Radiocarbon, 35, P.215-230.



## 第2節 寺尾中城の堀切から出土した炭化材樹種

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

当遺跡は高崎市寺尾町に所在する山城である。出土遺物が乏しいため堀切から出土した炭化材を用い

て、放射性炭素年代の測定(別報)と樹種同定が行われた。ここでは樹種同定結果を報告する。

### 2. 炭化材樹種同定の方法

樹種同定は炭化材から3方向の断面を作成し、その組織構造を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柁目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出

す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

### 3. 結果

2試料の炭化材組織を走査電子顕微鏡で観察した結果、横断面(写真1a)でエピセリウム細胞に取り囲まれた垂直樹脂道が主に晩材部に分布しているのが観察され、接線断面(写真1b)では放射組織の中間部が膨らみ水平樹脂道の存在が認められ、放射断面(写真1c)では窓状の分野壁孔と鋸歯状肥厚が顕著な放射仮道管が観察された。以上の形質から検討した2試料ともにマツ属複維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxylo*)と同定される。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。この2種は放射仮道管の鋸歯状肥厚の特徴から識別できる事もあるが、炭化材では鋸歯状肥厚の内腔に張り出た部分が断片的にしか見られないため2種を識別することはできなかった。しかし、一部で鋭利な鋸歯状肥厚が観察された事からアカマツの可能性が高いと思われる。

当遺跡は、室町時代初めから戦国時代の頃まで使われた山城で尾根筋を分断する堀切がいくつも作られている。検討された炭化材は堀切の中から出土したものであった。マツ属複維管束亜属は、低山地では斜面上部から尾根筋の日当たりが良く乾燥した所に生育しており、当遺跡の立地環境からも生育していた事は充分推測される。また、マツ属複維管束亜属は全国的に中世以降に分布拡大したことが知られている。従って、炭化材は山城の構築や維持管理の際に伐採されたか、または燃料材として燃やされた残渣であったかもしれない。しかし、放射性炭素年代測定値は2試料ともにModernであり、比較的新しい時期に堀切内に混在した可能性も否定できない。

表 寺尾中城の堀切から出土した炭化材樹種同定結果

遺 構	樹 種
堀切	マツ属複維管束亜属
堀切内最下層 ベルトD-D'北側付近	マツ属複維管束亜属

## 第5章 まとめ

### 第1節 寺尾城と寺尾中城

茂木 渉

#### 1 寺尾城について

寺尾城は中世初頭に出現する。治承4年(1180)新田義重が「故陸奥守嫡孫挿自立志之間武衛雖遣御書不返報引籠上野国寺尾城聚軍兵」<sup>(1)</sup>と寺尾城に兵を聚めた記事が吾妻鏡にある。この時の寺尾城はどんな城であったらうか。福原(神戸市)や鎌倉のような地域を柵や堀切り等で防禦する地域城で、寺尾も観音山丘陵と烏川に挟まれた一定の地域を区切り城としたものだったらう。山崎一氏は「地域城とは、守り易い地域の要所要所に防禦施設をし、全域を守るように備えた城砦で、鎌倉、福原、寺尾等鎌倉期頃の地域城では要点に柵、木戸を施した形式であり、南北朝期のものは、楠氏の十条谷や越後妻有のように数カ所、或いは数十カ所に城砦を構え、それらの連繋によって地域を守ったものである。」<sup>(2)</sup>と定義づけ、鎌倉時代の地域城と南北朝時代の地域城とを区別している。新田義重の寺尾城は、烏川と観音山丘陵とに挟まれた一定の地域を柵や堀等で限った一時的なもので、丘陵上に曲輪を築いたかどうか疑問である。

義重の寺尾在城は比較的短期間だった。自立に失敗し同年12月22日鎌倉で源頼朝に弁明して新田に帰ったからである。

寺尾は板鼻、兎玉、吉井・富岡、倉賀野・玉村方面などに路が通じる交通の要衝で、烏川の水運(烏川対岸の倉賀野は明治初期まで河岸で大いに賑わった)も考慮に入れての占地と言えるだろう。

ではなぜ、新田義重は自分の息子の居る山名でなくて寺尾に兵を聚めたのか。当時山名と呼ばれる地が現在の山名八幡宮の門前を中心とした町並みとは別な場所だったと考えられる。そうでないと寺尾と接した山名との関係がはっきりしない。山名は軍兵を聚めるのに適していない地だったのか。或いは要害ではなくて城には向かない場所だったのらう

か。寺尾に新田氏の所領があったか不明だが、あったとすれば寺尾氏との関係がどうなっているのらう。建久元年(1190)12月の吾妻鏡に寺尾氏の名が見えている<sup>(3)</sup>。

どうして、新田義重は新田ではなく寺尾に兵を聚めたのらうか。吾妻鏡には前出の記事に続いて「足利太郎俊綱為平家方人焼払同国府中民居属源家輩令居住故也」と上野国府の住民が源氏に属していたので、平家方の足利忠綱が国府を攻め民家を焼き払ったことが記されている。当時の足利忠綱は勢力が強大で、新田義重が新田の地で挙兵することは困難だったといわれている。

新田義重が新田に帰り、寺尾城は一時歴史上から姿を消した。再び登場するのは南北朝時代である。

元弘3年(1333)の新田義貞の挙兵により、上野国は南北朝の戦乱に突入していく。建武3年(1336)4月、北朝方の佐野義綱らが南朝方の拠点の板鼻を攻撃している<sup>(4)</sup>。南朝方の軍事施設が存在したのであろう。

このころ観音山丘陵には再び寺尾城が築かれていた。南北朝時代の寺尾城は寺尾上(乗附)、中(寺尾)、下(山名)の三城に茶臼山城を加えた四つの城と烏川に囲われた地域の総称でやはり地域城であった。山崎一氏はさらに「おそらく倉賀野、和田両城も配して、中心の館を防衛する形式であった」<sup>(5)</sup>としている。位置的に義重の寺尾城とどう関連があるのかは不明だが、このころになると城も規模は小さいが郭も明確に形成され、堀切等も設けられた。

南北朝期の地域城では、新田義貞とともに鎌倉を目指し、途中の分倍河原(府中市・多摩市)等で討死した秋間氏の本拠秋間(安中市)、その他高平(白沢村)、馬場(吉井町)、仁田山(桐生市)などがあつた。福井県の柚山城は新田義貞、脇屋義助らが拠つて北朝軍と戦つたことで知られているが、地域城の

形態を良く残っていて国指定史跡になっている。谷の入口の両尾根には小砦を配置し、それに併せて正面には堀と土居を築き、出入口（戸口）には木戸を設けていた。領主瓜生氏の館は、谷を入っていったところにあり、背後に柚山城を築いている。

これらの地域城には、南北朝期から観応の頃の伝承が残っている。寺尾城については、偽書とされている「信濃宮伝」や「浪合記」の他に、上野国赤坂庄和田記（白麴園本）には「新田実録ニ曰、正長年中頃和田小太郎新田家ニ属ス。寺尾茶臼城起也。応安元年三月武蔵守義宗、脇屋右衛門佐義治於寺尾城軍起也。応永四年兵部卿（尹）良親王、寺尾館へ御徒奉時、世良田大炊介政義、桃井右京助宗好、和田八郎左衛門尉從加ルト有之、和田高重男和田太郎重信是ハ応安元年生也。〈中略〉義信其勢強シテ此時和田家興起節、応永兵乱打続関東穩ナラズ。片岡郡寺尾今年迄繁榮也。新田家自然力衰へ、流々ト成行シテ仍テ、義信モ上杉安房守憲実ニ從フ。」<sup>(6)</sup>とある。この和田記自体が江戸時代の成立で、資料としての信頼度にかけるところもあるが、和田氏がなぜ正長の頃になって新田氏に属したのか不明だ。寺尾の先の山名には、山名氏の本拠があり、寺尾には後の伊豆国の守護代寺尾氏が居たであろうが、もともと寺尾には寺尾氏以外に新田氏の所領があったと考えられ、それゆえ義貞も鎌倉攻めの軍の集結地にこの近辺を選んだのであり、資料が乏しいからといって寺尾城も新田氏（南朝勢力）との関係を否定することは出来ない。茶臼山城もこの頃築かれたという。

文和元年（1352）足利尊氏は、安保泰規に武蔵国秩父郡内の寺尾次郎跡の所領を宛っている<sup>(7)</sup>。寺尾氏は、この年以前に尊氏に背いて所領を没収された。このことは、高崎近郊に反尊氏の勢力が存在していたことを示している。

信陽雑志には応永5年（1398）「迎尹良王於上野国寺尾城、新田一族守護之」とあり、また応永19年（1412）には「上杉憲定、攻寺尾城、城主世良田政親・新田一族等討死、尹良親王遁赴諏方」<sup>(8)</sup>とあるが、江戸時代の書なので確かな資料とはいえない。

南北朝時代とそれに続く戦乱をくぐり抜けた寺尾氏は、その後の資料によれば伊豆の守護代となって活躍している<sup>(9)</sup>。この寺尾氏の拠点がどこに存在したのか定かではない。南朝方勢力に占拠されていたのを回復し館に屋敷を構えたのであろうか。それとも寺尾氏は寺尾の地を離れていたのであろうか。山名氏は西国へ移住している。

中城は位置的には寺尾の中心部に近いが、南北朝時代の中心は館のあたりで、付近には左近屋敷や中屋敷等の地名も残っている。

館には戦国時代に吾妻の大柏木から佐藤氏が移ってきている。

永禄13年（1570）ころ「山名・鷹巣の間に、あたらしく城を取立」<sup>(10)</sup>と根小屋城が築城された。上杉・北条両氏の同盟に対して、武田氏が対抗して築いた城である。

城を築くにはそれぞれの役割があるからで、武田・上杉・北条の大勢力の前ではかつての地域城の小砦は役に立たず、上城（乗附）・山名（下城・前城）・鷹巣（茶臼山）城はそれぞれの勢力により戦国期に改修されたが、中城はその役割を終えていて、利用されなかったようだ。

中城から一つ尾根を挟んで茶臼山城がある。すでに戦国時代には茶臼山城の方がのろしの場としても利用価値があり、中城は放棄されたのだろう。

## 2 寺尾中城の縄張りについて

この度、寺尾中城の発掘調査が行われ（一部）小規模だがしっかりと掘切が検出された。中城は上・下城と異なり後世の改変がなかったようで、南北朝の頃の城の形態を良く残している。

それは、自然地形をそのまま利用して郭を構成し、削平面が少なく土木工事も最小限にとどめている。掘切も幅が狭く小規模だ。特徴的なのは、各郭の配置に独立性が高くまとまりがなくて、相互支援、連絡等があまり考慮されていない点だ。

では、第21・22図の中城と根小屋城とを比較してみよう。根小屋城は本郭（本丸）を中心にそれを取

第5章 まとめ

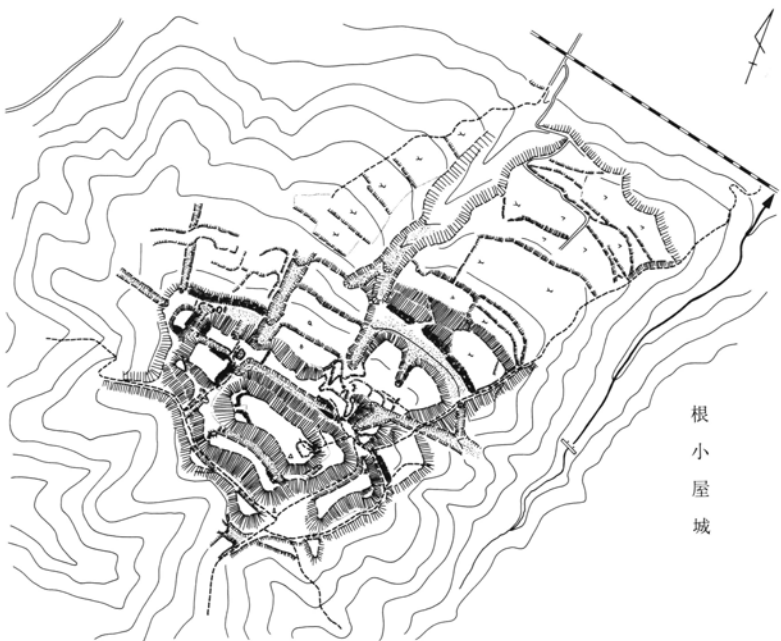
り囲うように各郭が配置され（囲郭式）、容易に敵は本郭には近寄れない。各郭も接しており独立した支点はなく相互支援がしやすい。本郭からの指示が徹底され機動的な戦闘ができる。一郭が敵に奪われても容易に奪還でき、郭面の高低差も考慮され他の郭から必ず矢玉が浴びせられるよう築城されている。長槍・鉄砲の使用を考慮して堀も大規模となり、長期の籠城を想定し本郭の下の堀は水堀とし付近に井戸を設けている。

これに対し中城では、主要部の本城（本丸）第二郭と第三郭とが別な支点を構成しており相互支援や戦闘指揮、連絡がとりにくい。第二郭と第三郭とが50mも離れていて、途中に堀切が二筋とこれに挟まれた小郭があるのみでほとんど工事がされておらず、ここが敵に侵入されやすい。特に第三郭が敵に奪われても第二郭からは矢玉が届かない。腰郭もあまりなく主要部へ直接敵にとりつかれやすい。それでも城郭として存在したのは、作戦に動員される兵力が少ない時代だったからだろう。戦国期ような大規模な兵力の前には無力であった。

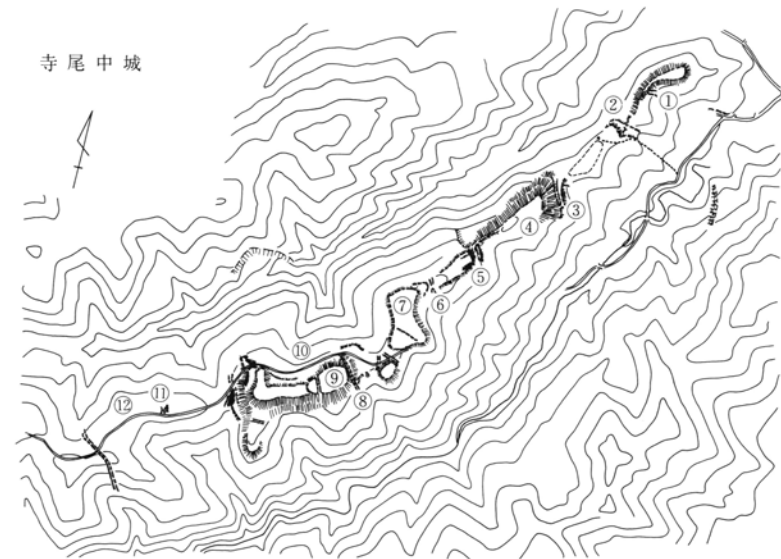
もう少し中城についてみていこう。鶴辺団地のある尾根と高崎市斎場のある尾根に挟まれた西南から東北方向に伸びる尾根上に占地している。両尾根よりも先端が少し引込んでいる本来なら鶴辺団地のある尾根の方が占地としては適当と考えられるが、他の寺尾上下城同様に直接外部に暴露しない内側の尾根に築かれている。「第二次世界大戦の末期、火力の劣弱な日本軍が多く用いるようになった背斜面陣地である。優勢な敵の攻撃に曝露しないためには、この工夫が適切なのである。谷間の

狭隘、錯雑な地形に敵を引き込んで、決戦を避けつつ行う持久戦が、尹良親王を中心とする南朝方餘党の唯一の抵抗手段であったと考えられる。」<sup>11)</sup>と山崎一氏は指摘している。

中城の規模は標高130mから190mの尾根を12の堀切で断ち切り郭を並べた並郭式（連郭式）の縄張りだが、本城（本丸）より西は捨郭なので基本は本郭が西南に偏した梯郭式の縄張りともいえる。全長は940mにも及ぶ。正面は字入小屋から登る。現在の石宮に登る道より少し東北側70mほどのところと推



第20図 根小屋城縄張図（山崎一氏の図を参考とした）



第21図 寺尾中城縄張図（山崎一氏の図を参考とした） Sc 1/10000

定される(第21図-①)。この登り口は、尾根突端の郭から強力に横矢が掛けられるようになっている。この道を尾根まで登り50mほど進むと追手戸口(虎口=出入口)に出る(第21図-②)。ここに木戸が設けられていたと推定される空間がある。更に石宮を通り過ぎ西南に110mほど進むと堀切にぶつかる(第21図-③)。ここを左に折れて坂戸口を登るが、ここにたどり着く迄に堀切上の12mほどの高台(第21図-④)から攻撃を受けることになる。この戸口を登り上げ、途中が極端に狭くなった小路を通り120mほど進むと物見郭の下の堀切に出る(第21図-⑤)。この堀切は掘った土を外側に盛り上げて堀が武者溜の様になっている。物見郭には東端に土居上の高まりがあるが、現在ではこの中間を道が通っているために元々2つに別れていたのか定かではない。物見郭からが主要部でここから50mほど進むと、堀切(第21図-⑥)があり第三郭(第21図-⑦)にたどりつく。第三郭はこの堀切より4mほど高くなっている。この郭は60m×30mほどの大きさで中城中最大の平場を持つ。おそらく簡単な居住施設が設けられていたと推定される。更に2筋の堀切を越え少し登ると第二郭の下の堀切(第21図-⑧)に出る。

この城の特徴的なものとして、幾つかの堀切はいちばん低い場所ではなくそれより少し高いところに設定されている。おそらく、攻撃側が勢いづいて登り始めたところに堀切を設けて出鼻をくじく目的だったのだろう。攻撃側には堀切が見えないようになっている。第二郭(第21図-⑨)は、45m×25mほどの郭で東と西が堀切によって限られている。標高は193mで本城(本丸)とほぼ同様な高さとなっている。立木を払えば東に茶臼山城の本郭を直接見通すこともできる。南面北面ともに腰郭は設けられていない。

本城は第二郭と堀切で分けられているが、東面はあいまいな作りとなっている。山崎一氏は本城東端に本城への戸口(第21図-⑩)を想定している<sup>12)</sup>。この戸口は第二郭との堀切に接した台により守られ

ている。本城は、80m×40mほどの規模だが自然地形をそのまま利用しているために削平面はそれほど広くない。東北側に腰郭を設けている。西面6mほど下には枡形状の戸口が設けられているが、低土居を設けた嚴重な構えとなっている。ここが搦手戸口と推定される。南に張り出す尾根には堀切が設けられ、尾根伝いに登ってくる敵を防いでいる。

本城の西下には土居を挟んで2筋の堀切が構えられている。他の堀切と比較して嚴重に築かれているが、ここから西南部は地形的にもなだらかな起伏が多く、防御的にも弱いのでここを強化する必要があった。ここから西南部は捨郭で80m先には幅5mほどの堀切が構えられている(第21図-⑪)。しかし、その間には特別な工事の形跡は認められない。更に尾根伝い100mほど行くと今回調査された堀切がある(第21図-⑫)。この堀切の先の高所に物見櫓が構えられた形跡があるので、城はもっと広がったのかも知れない。しかし今のところ明確な堀切等が発見されていないので、今回の堀切を城の西限としておくことにした。

このように自然地形そのまま利用し、工事を最小限に抑さえ堀切も小規模で、まとまりなく郭を配置する古い形態を残しているところにこの城の特徴がある。

- 註 (1) 群馬県『群馬県史 資料編6 中世2』1984 61頁 吾妻鏡 No.9  
 (2) 山崎 一「調査の手引き」『群馬県の中世城館跡』(群馬県教育委員会)1985 7頁  
 (3) 高崎市『新編高崎市史 資料編4 中世II』1997 55頁 吾妻鏡 No.18  
 (4) 同上 137頁 落合文書 No.95  
 (5) (1)に同じ 7頁  
 (6) 高崎市『高崎市史 第三巻』1968 762頁 上野国赤坂荘和田記  
 (7) (3)に同じ 157頁 安保文書 No.116  
 (8) (3)に同じ 204頁 信陽雑誌 No.184  
 (9) (3)に同じ 195頁～ 三嶋大社文書 No.170, 171, 172, 175, 176円覚寺文書 No.179他  
 (10) 『甲陽軍鑑』 卷第11下 品第37 274頁 氏政輝虎深沢城攻事付氏政より輝虎憑引出す事  
 (11) 山崎 一「乗附城(寺尾上城)址」『高崎の散歩道 第11集』42頁  
 (12) 山崎 一「寺尾中城」『群馬県古城址の研究 上巻』1971 320頁

## 第2節 調査された遺構に関する小考

### 1 調査成果の概要

繰り返しになるが、今回発掘調査を行ったのは寺尾中城主要部を200m程西に尾根筋を辿った地点であった。調査区は林道の設置によって一部が削られまたは埋められていたものの、全面に天明3(1783)年浅間山噴出のAs-A軽石の堆積が見られ、基板層とAs-A軽石の間には調査区全域ではないが天仁元年(1108)年噴出のAs-B軽石を含む土壌が15cm以下の厚さで堆積していた。

調査では調査区中位の尾根筋頂部(二つ尾根調査区西端部)の西側に、調査前から確認されていた堀切を調査した。堀切は弓なりのプランを呈する薬研状の箱堀で、その西側は掘削され尾根筋に段差が設けられていた。堀切の上幅は240cm以上、深さは3m程を測り、尾根中央部の底面両側に南側で1m、北側で1.7mの段差が設けられていた。南斜面は百数十cmの深さに掘削されるが、その先端は調査区外に延び、北斜面は西に屈曲させて壁面と底面が人為的に整えられた谷につながれていた。

堀切の東側には人為的削平の可能性を持つ20cm程の段差を伴う隅丸台形プランの平坦面があり、その中部東端寄りには焼土面が見られた。また調査区西端(五つ尾根調査区)の頂部には小型のピットが十数基見られ、2m数十cm四方の4本柱の簡易な構造の建築物1棟の設置の可能性が考えられた。また、三つ尾根調査区東半部には尾根筋を狭くするための加工痕ともとれる堆積層を確認した。

しかし調査区の殆どの部分では切岸などの施工の痕跡や、道路の硬化面等活動の痕跡などについて確認することはできなかった。即ち全くの自然面であり、また出土遺物は皆無で、第4章で報告があったように炭化材の年代測定結果も現代に近いものであった。尚この年代については、堀切覆土の上位層にAs-A純層が堆積する、つまり堀切が少なくともAs-A降下以前のものである以上、近年に埋められた或いは埋まったものと判断せざるを得ない。

### 2 調査した遺構と表出面の評価について

さて、寺尾中城の評価については前項で茂木渉氏によってなされているので、ここでは調査された遺構に限って検討を加えてみたいと思う。

#### (1) 西端部の建物遺構について

今回の調査では樹木の痕跡を含めピット及びピット様のものを多数確認したが、この中で(現在の表層土やAs-A軽石の混入しない)18世紀中葉以前のピットが含まれていたのは四つ尾根調査区頂部のものだけであった。その配置も植林によるそれとは異なるため杭跡と認識し、先に述べたような建物を想定した。しかも、設置箇所は日常生活のそれとは想定しにくいから、この建物は寺尾中城に伴うものと判断したのである。この場合の建物の設置意図については次のように考える。

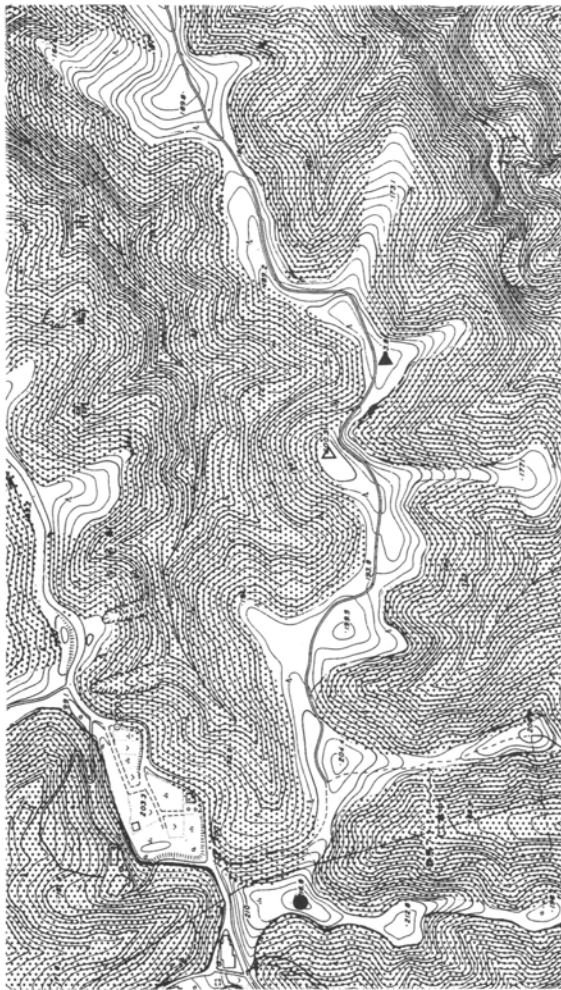
寺尾中城の乗る尾根筋が北沢川北側の尾根に取り付く部分には狼煙台(●)が想定されているが、ここから340m程離れた東側の頂部(第22図一△、以下「頂部2」とする)までの間は斜面を下ってから緩やかに続く尾根筋で、進入は比較的容易である。しかし頂部2から四つ尾根調査区頂部(第22図一▲、以下「頂部1」とする)までの尾根筋は落差13mの斜面を下り、狭く短い鞍部を挟んでやや急な斜面を上らなければならない。頂部1は頂部2より4mほど低いものの、その距離は90m近くあり矢は届かない。従ってここはある意味で最初の防衛ラインとなり得るのであって、このことから頂部1の建物は通路である北側鞍部の監視等の機能を持っていたのではないかと考えるのである。

頂部1の建物の構造はつまびらかではないが、上述の建設意図と想定される柱の太さが20cm程もあることなどから、その建物は寧ろ櫓のような構造のものではなかったかと思われる。しかし頂部に削平等恒常的设置を意図した地形等が施されておらず、基礎または柱の打ち込み深度も十数cmと浅いことから仮設的な建物であったものと想定される。

(2) 堀切周辺の遺構について

堀切は寺尾中城の搦め手筋にあって明瞭なものとしては最も西に位置する遺構である。掘削位置は二つ尾根調査区頂部(以下「郭」とする)の直ぐ西側で、尾根筋の最も低くなる位置からは10m程東に寄っている。このような掘削位置は寺尾中城の二の郭の西側の堀切などにも見られるものである。

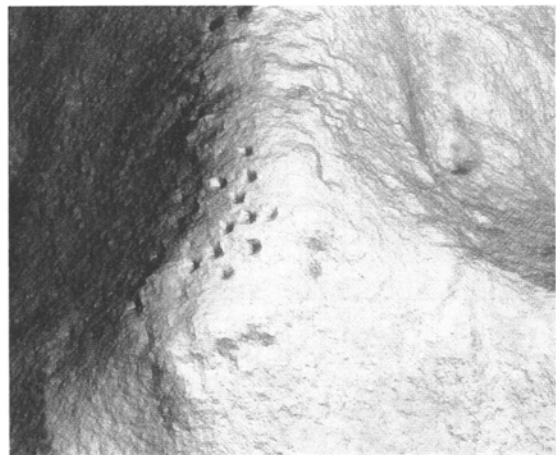
堀切は尾根頂部だけでなく、南北両側斜面に長く延ばされていた。南斜面に於ける堀切の掘削深度はさして深くないが、堀切底面も地形に準拠した傾斜角を有するので斜面に於ける堀切の傾斜はきつい。北斜面は南斜面に比べると傾斜は弱い、南斜面の堀切に比べ掘削深度は深く堀或いは谷の幅も広い。また中央部では堀切の西側を削って東側の面との間に1m程ではあるが高低差を設けており、尾根筋両側の堀切底面には段差を設けている。この形態的特



第22図 寺尾中城の尾根筋 (上が東方)

徴はこの堀切が単に尾根筋を遮断するためだけのものではなく、「徒歩立ちの武者たちが」「堀の底から城壁の際へ攻め登」ろうとする南北朝期の戦い<sup>(1)</sup>に対応しようとしているものであることが窺われる。

また堀切の規模は、その長さについては現地形の測量結果等から総延長80m以上(南斜面45m以上、北斜面35m以上)と長いものになるものと推定される。しかしその深さは最もしっかりした掘り方の尾根筋部分にあっても東肩で2.5m前後、西肩で1.8m前後、上幅も最小2.4mで全体としても概ね3m程になるに過ぎないものと想定される小規模なものであるが、この数値は14世紀後葉から15世紀前半の居館型山城である福島県の猪久保城<sup>(2)</sup>で発掘された堀、即ち上幅10mで深さ15m、或いは上幅9mで深さ7mというものに比べるとかなり小さいものである。一方、寺尾中城の本城以東部の堀切の上幅は現地形に於いても5m以上と今回調査した堀切に比べると一回り大きいものであった。中城主要部の発掘調査が行われていない以上単純に比較することはできないが、この違いについては、調査区付近が寺尾中城主要部に対して捨郭的な効果を求められた二次的的区域として認識されていたため元々その規模が小さく造られていた可能性が考えられ、或いはそうした認識から寺尾中城の主要部に改修が施されていたのに対し、調査した堀切が当初の規模のままに置かれていた可能性が考えられる。



第23図 頂部1のピット群 (左下方が頂部2)

ところで内郭側に当たる堀切東肩には何らかの遮断施設の設置が想定されたが、堀際には柱穴や杭の打設痕などは全く認められず、柵や土塀などの構造物の設置は行われなかったものと判断された。また土塁についても堀切肩部に土塁そのものやその痕跡は認められず、堀切の覆土も、例えばB-B'セクションの5c・5h層が東側からのものであるが、土塁を形造る程の土量はなく、堀切肩部の自然崩落によるものと判断されるため土塁設置の可能性も無いものと思われる。従って遮断施設を設けたとしても、逆茂木や盾を並べるようなものと想定される。<sup>(3)</sup>

また堀切の東側の低い段差を伴う平坦面にもピット等は確認されなかったため常設的な構造物は造られず、盾を並べた垣盾で囲った槽のような臨時的防御施設で対応していた可能性が考えられる。また分岐する尾根にも本城のように堀切が施されることはなく、尾根の落ち際にもピットや土塁の痕跡等は見られなかった。従ってここもせいぜい逆茂木や垣盾等で防御施設を整えた程度のものであったと考えられる。尚、三つ尾根調査区の緩傾斜部分では意図的に尾根の幅を狭めた可能性がある。

### (3) まとめ

以上のように調査区で確認された殆どの部分は自然地形が良く残されるもので、郭面も不明瞭で、余り土木施工は行われていないものであった。建物も常設的なものではなく、堀切を除けば防御施設も逆茂木や垣盾を使った簡易且つ仮設的なものであったと想定された。唯一しっかりした構造を持つ堀切は、形態的には南北朝期以降の戦術に対応したものであったが、その規模は山城が居館的機能も伴うようになった猪久保城のような時期のものに比べると小型のものであった。

寺尾中城は室町後期にも使用されたと考え

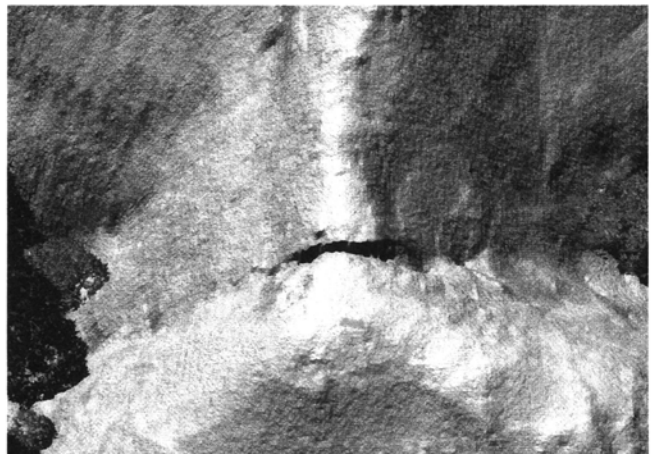
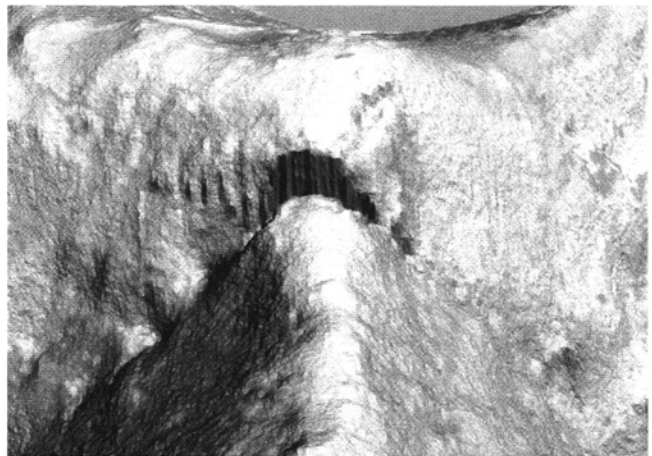
られる城郭であるが、<sup>(4)</sup>前項で述べられたように基本的にはその築城の位置や縄張りは南北朝期の傾向を示す城である。そして今回の調査で見られた遺構等の状態は、こうした傾向を裏付けるものであるように思われる。出土遺物が無い以上時期の明示は難しいが、堀切や郭面の不明瞭な点などから、少なくとも本調査区のそれは南北朝の後期、14世紀後葉頃の所産として判断できるように思われる。

註 (1) 中澤克昭『中世の武力と城郭』(吉川弘文館)1999 181頁。

(2) 財団法人福島県文化センター『東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪久保城』(福島県文化財報告第308集)1994

(3) 前述1)の181~185頁に示された絵巻物による構造物を参考とした。

(4) 寺尾中城の物見郭付近で15世紀後半以降と想定される内耳鍋の破片が採集されていたが、現在その所在が確認できなくなっている。



第24図 堀切付近鳥瞰図 (上: 掘め手より、下: 内郭より)



### 第3節 おわりに

以上のように、寺尾中城の発掘調査では小振りだが整った形態の堀切と若干の削平面、ピット等を確認した。しかし全体的としては調査区は自然の地肌がよく残されるものであった。そうした通常目にする城郭の調査現場とは異なる景色に戸惑いを覚えつつも、我々は文字通り地を這うように想定されるあらゆる遺構・遺物を探したのである。結果として遺物は全く見られず、炭化物の年代も“Modern”を示し、遺構も見方によっては堀切だけといった印象のものであった。尤もそれは前節に述べたように寧ろ古い城郭の姿を残すと判断されるものであり、この判断に誤りがなければ我々は調査例の少ない南北朝後半期頃の城郭に触れたことになる。「なかった」ことがあって希少なデータとなるのである。

筆者は今、調査区の周囲を廻るCGを見乍ら発掘現場を思い出している。険しい斜面に安全対策は常に頭から離れず、森林保全の観点から土砂を斜面越しにベルトコンベアと人力で運び上げなければならなかったこと。積雪に悩まされ、土壌の凍結に苦しみ、時間限定で発電機を動かし、もらい水をしたこ

となど。しかしこのような条件下、発掘補助員並びに土木作業員諸氏は実に良く作業をこなしてくれた。大きな災害もなく調査を終えられたのは彼らのお陰である。改めて謝意を伝えたい。そして関係各位、地元の皆様の御協力にも感謝申し上げたい。

さて、調査終了後間もない日の日暮れ時、筆者は調査現場を訪れて高見とあだ名した調査区頂部から緑なす山々のそこそこに桜の花が溶けるように色づくのを見た。それは手前側の地肌の現れた調査区との間に不思議なコントラストを描いていた。しかし1年後、人を案内して訪れた時には貝化石の転がる平坦な土地に迎えられることとなった。あの春の日の光景も記憶だけのものとなり、今も工事は続いている。しかし城の殆どは残された。故山崎一先生が縄張図を記されてから35年、平成11(1999)年6月には史跡整備委員会が発足し、長く静けさの中にあった寺尾中城はしばしの調査の時を経ていよいよ活用の時代を迎えようとしている。ここに報告した発掘調査の成果が今後の城郭研究や史跡整備に活用されることを祈って稿を閉じたいと思う。



発掘調査チーム 平成9(1997)年3月26日撮影



整理チーム 平成11(1999)年11月11日撮影

#### 主な参考文献

- 『日本城郭体系』1980～1981
- 群馬県教育委員会『鎌倉街道』（歴史の道調査報告 第17集）1983
- 福島県教育委員会『福島県の中世城館跡』1988
- 石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』（新人物往来社）1991
- 〔同書所収 柴田龍司『中世城館の画期——館と城から館城へ——』〕
- 〔同書所収 齋藤慎一『本拠の展開——一四・一五世紀の居館と「城郷」・「要害」——』〕
- 財団法人 福島県文化センター『東北横断自動車道遺跡調査報告28 猪久保城』（福島県文化財報告第308集）1994
- 〔同書所収 千田嘉博『田村地域の中世社会と城館』〕
- 高崎市史編さん委員会編『高崎市史資料編3 中世I』1988
- 中澤克昭『中世の武力と城郭』（吉川弘文館）1999



# 寺尾中城遺跡

〔写真図版〕





寺尾中城（手前）と高崎市街地（南西より）



伐採前の調査区



調査前の調査区全景（西より）



調査区全景



伐採後の四つ尾根調査区（東より）



積雪時の調査区（西より）



建設機械による表土除去（一つ尾根調査区）



伐根状況（二つ尾根調査区）



三つ尾根調査区のベルトコンベア・ライン



遺構確認状況（三つ尾根調査区東半部）



As-A 除去及び遺構確認状況（五つ尾根調査区）



堀切南斜面掘削及び土運搬状況（北東より）



一つ尾根調査区全景（南より）



一つ尾根調査区及び二つ尾根調査区北部（北より）



二つ尾根調査区全景（南より）



二つ尾根調査区南部（東より）



二つ尾根調査区頂部（東より、矢印は焼土面）



三つ尾根調査区西部（西より）



三つ尾根調査区全景（東より）



四つ尾根調査区東部及び堀切付近（南西より）



四つ尾根調査区全景（北より）



標準的土層堆積状況（四つ尾根調査区C-C'セクション）



四つ尾根調査区頂部（北東より）



四つ尾根調査区頂部ピット群（北東より）



四つ尾根調査区頂部ピット8セクション



五つ尾根調査区全景（北東より）



五つ尾根調査区全景（南西より）



五つ尾根調査区先端部自然崩落面（西より）





樹木伐採前の堀切（西より）



伐採後の堀切北斜面（北西より）



As-A 軽石除去後の堀切南斜面（北西より）



堀切南斜面全景（南東より）



堀切南斜面全景（北西より）



堀切埋土断面（南斜面 A-A'セクション）



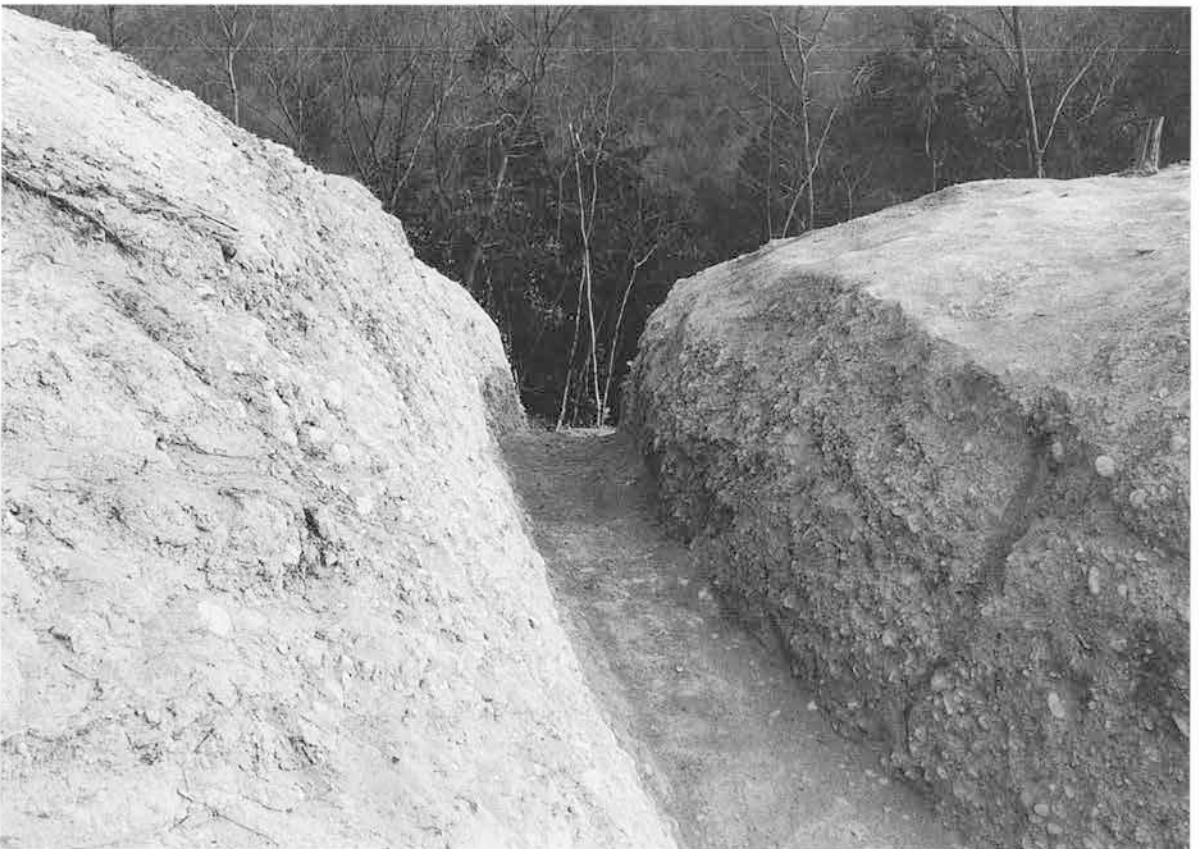
堀切南段差（南東より）



堀切頂部の炭化材出土状況（中央やや下）



堀切埋土断面（頂部 B-B'セクション）



堀切頂部（北西より）



堀切頂部中央付近 (北西より)



堀切頂部 (南東より)



堀切頂部 (北西より)



堀切頂部北寄り部分 (南東より)



堀切埋土断面 (頂部C-C'セクション)



堀切北斜面南部 (南東より)



堀切埋土断面 (北斜面D-D'セクション)



堀切北斜面炭化物出土状況 (北西より)



堀切北段差（北西より）



堀切北斜面谷部全景（南より）



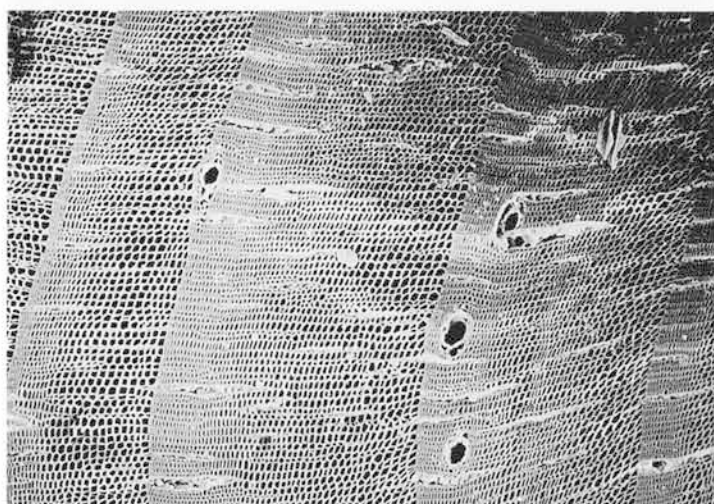
堀切北斜面谷部中程（西より）



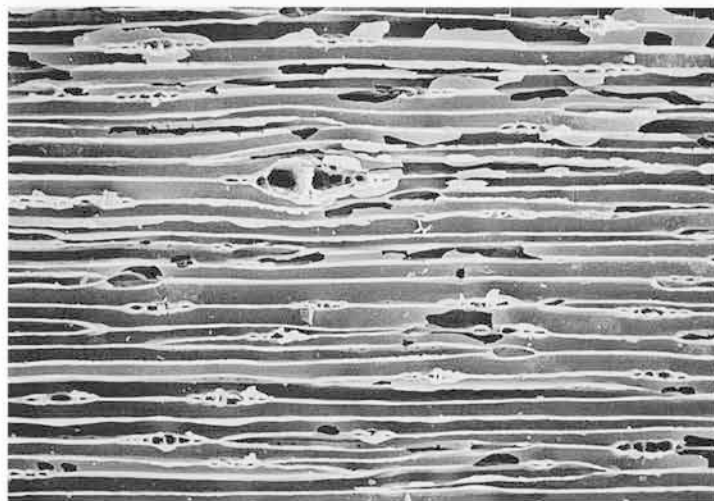
堀切北斜面谷部北寄り（南西より）



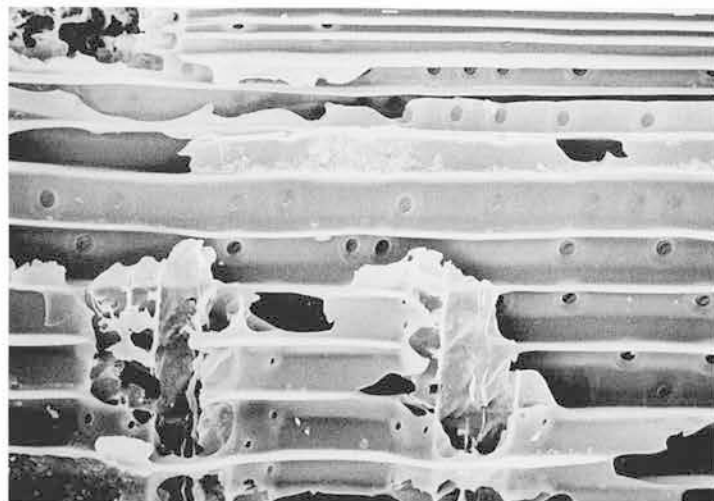
堀切北斜面全景（北西より）



1a マツ属複維管束亜属 (横断面)  
堀切 bar: 0.5mm



1b マツ属複維管束亜属 (接線断面)  
bar: 0.1mm



1c マツ属複維管束亜属 (放射断面)  
bar: 0.1mm

寺尾中城遺跡出土炭化材樹種



寺尾上城（乗附城）二重の堀切（東より）



寺尾下城（山名城）主郭西の堀切（南より）



寺尾鷹巣城の南側堀切（南より）



根小屋城 主郭東の横堀（南より）



寺尾中城 本城西の二重の堀切（西より）



寺尾中城 三の郭（南より）



寺尾中城 物見郭東の堀切（北より）



調査区現況（東より、1999.11.14）

## 報告書抄録

ふりがな	てらおちゅうじょういせき							
書名	寺尾中城遺跡							
副書名	群馬ファミリーパーク建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ番号	第264集							
編著者名	石守 晃							
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団							
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2							
発行年月日	2000(平成12)年2月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てらおちゅうじょう 寺尾中城	たかさきし 高崎市 てらおまち 寺尾町	102020	群馬県1972 高崎市43-B-1	36度 17分 13秒	138度 59分 56秒	1997.12.15 } 1998.03.31	7,000㎡	大規模公園建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺尾中城遺跡	城郭	中世	堀切	なし	なし

群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第264集

## 寺尾中城遺跡

群馬ファミリーパーク建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成12年2月10日 印刷

平成12年2月15日 発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-0061 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局